岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第585集

西部（せいぶ）遺跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業中居地区関連遺跡発掘調査

２０１１

岩手県県南広域振興局農政部北上農村整備センター
(財)岩手県文化振興事業団

西部遺跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業中居地区関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたり大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、中山間地域総合整備事業中居地区に関連して平成21年度に発掘調査された西部遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では縄文時代前期の集落であることが明らかになったほか、中世後半と見られる建物跡も見つかりました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県県南広域振興局農政部北上農村整備センター、花巻市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成23年３月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長　池　田　克　典

例　言

1　本報告書は、岩手県花巻市大迫町外川目第27地割141番地ほか所在する西部遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2　岩手県遺跡登録台帳における遺跡番号・調査略号は、次の通りである。

MF09-0319／SB-09

3　本遺跡の発掘調査は、中山間地域総合整備事業中居地区に伴い、岩手県教育委員会の調整を経て、岩手県県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室（現岩手県県南広域振興局農政部北上農村整備センター）の委託を受けた（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。なお、経費負担は岩手県教育委員会が岩手県県南広域振興局農政部に農家負担分を補助している。

4　野外調査及び室内整理期間、調査面積、担当者は次の通りである。

野外調査　平成21年９月１日～平成21年11月19日／1,450㎡／杉沢昭太郎・菅野悟

室内整理　平成21年11月１日～11月15日、平成22年１月１日～３月31日／杉沢昭太郎・菅野悟

5　基準点測量は、協進測量設計、航空写真は東邦航空株式会社に委託した。

6　本報告書の執筆は、Ⅰ「調査に至る経過」を岩手県県南広域振興局農政部北上農村整備センターに依頼した。Ⅱ～Ⅴは、杉沢と菅野が担当した。

7　分析鑑定は石質鑑定を花崗岩研究会、年代測定を加速器研究所に委託した。

8　発掘調査では、花巻市教育委員会ならびに遺跡周辺住民の方々に多大なるご協力をいただいた。

9　野外調査では、花巻市内の作業員の方々にご協力をいただいた。

10　土層の色調は、「標準土色帳」（農林水産省農林技術会議局監修）に準拠した。

11　本報告書で使用した地形図は国土地理院のもので、図毎に図幅名を記している。

12　本遺跡本調査の結果は、先に「西部遺跡現地公開資料」（平成21年11月６日）「平成21年度発掘調査報告書」第571集（平成22年３月31日）において概要を発表しているが、本書の内容が優先するものである。

13　本遺跡の出土遺物及び諸記録類は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2

1　遺跡の位置 …… 2

2　地質・地形 …… 2

3　周辺の遺跡 …… 4

Ⅲ　野外調査・室内整理の方法 …… 6

1　野外調査 …… 6

2　室内整理 …… 6

Ⅳ　検出された遺構と遺物 …… 11

1　基本層序 …… 11

2　竪穴住居跡 …… 11

3　掘立柱建物跡 …… 14

4　土　　坑 …… 15

5　焼　　土 …… 17

6　溝　　跡 …… 17

7　集　　石 …… 18

8　遺構外出土遺物 …… 18

Ⅴ　ま　と　め …… 55

Ⅵ　分　　析 …… 59

報告書抄録 …… 93

図版目次

第1図　岩手県・花巻市大迫町 …… 1
第2図　遺跡地形図と調査区 …… 3
第3図　周辺の遺跡 …… 5
第4図　グリッド配置図 …… 7
第5図　遺構配置図1 …… 8
第6図　遺構配置図2 …… 9
第7図　遺構配置図3 …… 10
第8図　基本土層模式図 …… 11
第9図　1・2号竪穴住居跡 …… 22
第10図　3・4号竪穴住居跡（1） …… 23
第11図　3・4号竪穴住居跡（2） …… 24
第12図　6号竪穴住居跡（1） …… 25
第13図　6号竪穴住居跡（2） …… 26
第14図　6号竪穴住居跡（3） …… 27
第15図　1号掘立柱建物跡 …… 28
第16図　2号掘立柱建物跡 …… 29
第17図　土坑1 …… 30
第18図　土坑2、溝跡 …… 31
第19図　焼土1 …… 32
第20図　焼土2、集石 …… 33
第21図　土器1 …… 34
第22図　土器2 …… 35
第23図　土器3 …… 36
第24図　土器4 …… 37
第25図　土器5 …… 38
第26図　土器6 …… 39
第27図　土器7ほか …… 40
第28図　石器1 …… 41
第29図　石器2 …… 42
第30図　石器3 …… 43
第31図　石器4 …… 44
第32図　石器5 …… 45
第33図　石器6 …… 46
第34図　石器7 …… 47
第35図　石器8 …… 48
第36図　西部遺跡における縄文時代前期後半の集落概念図 …… 58

表目次

第1表　周辺の遺跡一覧表 …… 4
第2表　焼土観察表 …… 17
第3表　土器・土製品観察表 …… 49
第4表　石器・石製品観察表 …… 52
第5表　陶磁器観察表 …… 54

写真図版目次

写真図版1　花巻市大迫町 …… 63
写真図版2　遺跡遠景 …… 64
写真図版3　遺跡近景と現況 …… 65
写真図版4　遺跡現況ほか …… 66
写真図版5　調査状況 …… 67
写真図版6　竪穴住居跡1ほか …… 68
写真図版7　竪穴住居跡2 …… 69
写真図版8　竪穴住居跡3 …… 70
写真図版9　竪穴住居跡4 …… 71
写真図版10　竪穴住居跡5 …… 72
写真図版11　竪穴住居跡6 …… 73
写真図版12　土坑1 …… 74
写真図版13　土坑2 …… 75
写真図版14　焼土1 …… 76
写真図版15　焼土2、集石、溝跡 …… 77
写真図版16　調査風景ほか …… 78
写真図版17　土器1 …… 79
写真図版18　土器2 …… 80
写真図版19　土器3 …… 81
写真図版20　土器4 …… 82
写真図版21　土器5、土製品、陶磁器1 …… 83
写真図版22　陶磁器2 …… 84
写真図版23　石器類1 …… 85
写真図版24　石器類2 …… 86
写真図版25　石器類3 …… 87
写真図版26　石器類4 …… 88
写真図版27　石器類5 …… 89
写真図版28　石器類6 …… 90
写真図版29　石器類7 …… 91
写真図版30　石器類8 …… 92

Ⅰ　調査に至る経過

西部遺跡は、「中山間地域総合整備事業中居地区」のほ場整備に伴い、その事業地区内に存在することから、発掘調査を実施することとなったのである。

本地区は花巻市大迫総合支所の東南東約２kmに位置している。現況農地は、小区画不整形であるうえに耕作道路の幅員も狭小であることから、効率的な農作業ができない状況である。また、現況水路は、老朽化による漏水で用水不足が生じている他、堆積土砂の撤去等維持管理にも支障を来している状況にある。このため、区画整理（Ａ＝20.6ha）を行い、農作業の効率化及び生産性の向上を図る。また、漏水が著しい農業用水路を整備（Ｌ＝2.1km）し、用水不足の解消や維持管理の節減を図るものである。

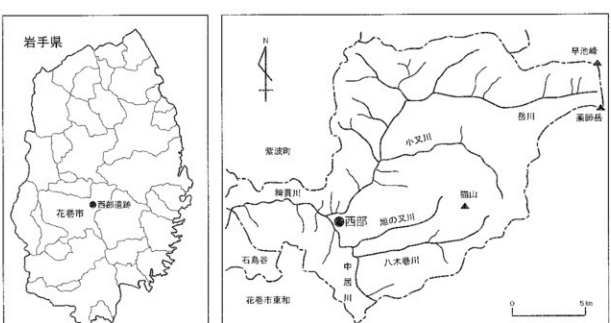
当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室（現岩手県県南広域振興局農政部北上農村整備センター）から平成20年９月24日付け花総農整第113-13号「中山間地域総合整備事業中居地区における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に試掘調査依頼を行った

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成20年10月20日、21日、試掘調査を実施し、工事着手するには、西部遺跡の発掘調査が必要になる旨を平成20年11月13日付け教生第1046号「中山間地域総合整備事業中居地区における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答してきた。

このため、花巻農村整備室より平成21年１月22日付け花総農整第113-24号「埋蔵文化財保護に係る工法協議について」により、保護盛土工法による箇所と発掘調査による箇所について協議を行った。この回答が平成21年2月4日付け教生第1396号「埋蔵文化財保護に係る工法協議について（回答）」で回答があったものである。

その後、岩手県教育委員会の調整を経て、平成21年８月21日付けで当農村整備室と財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（岩手県県南広域振興局農政部北上農村整備センター）



第１図　岩手県・花巻市大迫町

II　遺跡の立地と環境

1　遺跡の位置

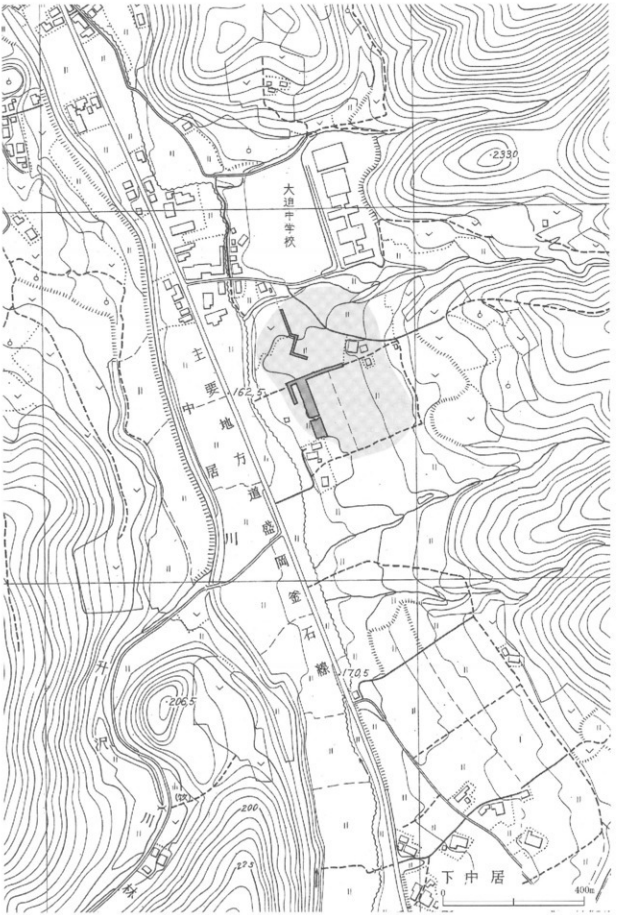
西部遺跡は、岩手県花巻市大迫町外川目第27地割141番地ほかに所在する。遺跡のある旧稗貫郡大迫町は平成18年1月1日に花巻市との合併により、花巻市大迫町となった。

旧大迫町は、早池峰山（標高1,914m）を源とする稗貫川水系の上・中流域にあたりその面積は246.27㎢。北は盛岡市、宮古市川井、紫波町、東を遠野市、南は遠野市宮守地区、花巻市東和町、西を花巻市石鳥谷町と接していた。

本遺跡は、花巻市立大迫中学校の南隣に広がっている。稗貫川（岳川）とその支流である中居川の合流点から南へ約1.5kmに位置し、中居川東岸の河岸段丘面上に立地している。遺跡の現況はその大半が水田で人家が数軒ある。水田以前には桑畑となっていたらしい。

2　地質・地形

北上山地の最高峰・早池峰山及びその周辺の山々を水源とする小河川（折壁川・黒沢川・小又川）等が集まり岳川となって南西方向へと流れている。それが大迫町の内川目地区である。南東の遠野市側の山々を水源とする八木巻川や旭ノ又川が中居川と出合うのが外川目地区である。岳川と中居川とが合流するところが大迫地区で、河川はここで稗貫川と名前が変わり北上川へ向け西流する。この西流する稗貫川流域が亀ヶ森地区である。この稗貫川によって形成された河岸段丘は、中居川との合流点にあたる大迫付近で最もよく観察でき、大きく三段に分けられている。大迫地区での下位段丘は標高150～160m、中位段丘は標高160～170m、上位段丘は標高170～200mと区分されている。下位段丘は岳川・中居川流域ではあまり発達しておらず、岳川流域（内川目地区）では低位段丘（標高200m前後）と上位段丘（標高210m前後）の2区分となっている。ここでいう低位段丘は前述した中位段丘に相当する。中居川流域（外川目地区）でも同じ傾向であるが、本遺跡付近までは大迫地区の分類の中で段丘面を捉えた。中位段丘と上位段丘との区別が明瞭ではなくなって緩やかに傾斜する台地状になっているものの、下位段丘から1段高い面であること、基本的な標高などから中位段丘と理解した。外川目地区、内川目地区はともに河川に沿った細長い段丘が多くその面積も狭い。亀ヶ森地区でも右岸は比較的段丘面が広く発達しているものの、左岸は面積が狭く、東西に細長く伸びた段丘は、小規模な沢によって開析されている。但し遺跡の分布をみると、右岸・左岸に大きな偏りは見られないようである。西部遺跡は、稗貫川の支流になる中居川の右岸中位段丘に立地している。調査した地点の標高は169～173mで、中居川との比高差は約20mである。この中位段丘の段丘崖から中居川までは約120mあり、その間には標高159～161mの下位段丘相当面が広がっている。遺跡ののる中位段丘は南北約500m　東西約150mの広がりを有し、その北端部は花巻市立大迫中学校となっている。段丘面は東から西へと下る緩斜面地形になっており、小規模な沢によって大迫中学校とそれ以南が分けられている。遺跡はこの沢を北端とし、南北200m、東西100mの範囲と見られている。



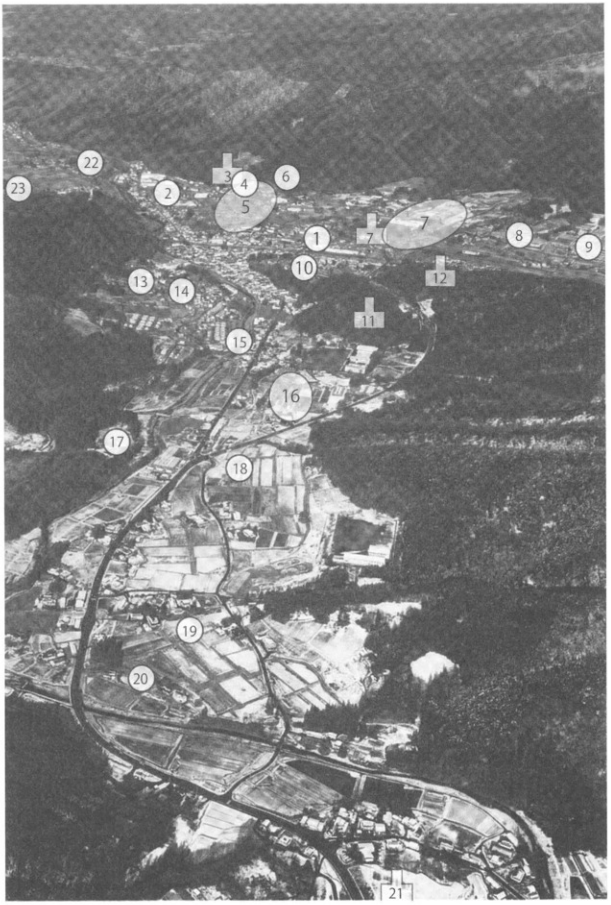
第２図　遺跡地形図と調査区

3　周辺の遺跡

西部遺跡のある花巻市大迫町には、200ヵ所を超える遺跡が登録されている。ここでは本遺跡の周辺にある遺跡の分布図と遺跡の概要を整理した一覧表を作成した。

第1表　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	内容	主な時代	所在地	その他
1	屋敷	集落跡	縄文土器（後・晩期）・土偶・中世竪穴建物・掘立柱建物・陶磁器（志野・初期伊万里・唐津）・永楽通宝・砥石・鉄製品・炭化雑穀	縄文後・晩期、中～近世	大迫屋敷	昭和62・平成17年調査。
2	ぶどう沢	散布地	縄文土器（後・晩期）	縄文後・晩期	大迫ぶどう沢	
3	藤館	城館跡	平場・井戸・帯郭	中～近世	大迫ぶどう沢	
4	明道沢	散布地	縄文土器（前・中期）	縄文前・中期	大迫ぶどう沢	
5	観音堂	人根橋集落	竪穴住居・配石遺構・縄文土器（中・後・晩期）・石器	縄文中原半体	大迫台	昭和54～59、平成元～2年調査。
6	サヅカ長根	散布地	石器	縄文	大迫第10地割	
7	藤四郎館	城館跡	空堀	中世	大迫下町	天神館とも。
7	大神ヵ丘	大堤根集落	竪穴住居・縄文土器（前・中・晩期）・石器	縄文前・中・晩期	大迫大神ヵ丘	半分削平。昭和46・平成2年調査。
8	熊の上	集落跡	縄文土器（前・中期）・石器	縄文前・中期	大迫熊の上	昭和61・平成2年調査。
9	鳥長根	散布地	縄文土器	縄文	大迫鳥長根	
10	上の山	集落跡	フラスコピット・縄文土器（草・中・晩期）	縄文草・中・晩期	大迫上の山	平成2年調査。
11	中居館	城館跡	帯郭・井戸	中世	大迫上の山	現、愛宕山町民公園。
12	与五助館	城館跡	帯郭・空堀	中世	大迫川原町	
13	大迫小学校裏	散布地	縄文土器（後期）・石斧	縄文後期	大迫向山根	
14	白山	集落跡	竪穴住居・フラスコピット・縄文土器（前・中期）・石器	縄文前期・中期	大迫向山根	昭和63年調査。
15	羊通	散布地	縄文土器（中期）・石器	縄文中期	大迫堀町	
16	西郭	散布地	縄文土器（前期）	縄文前期	外川目西郭	
17	ます沢口	散布地	縄文土器（前期）・石器	縄文前期	外川目下中居	
18	下中居Ⅲ	散布地	縄文土器	縄文	外川目下中居	
19	下中居Ⅰ	散布地	竪穴住居・炉・縄文土器（前期）・土偶・石器・石製品	縄文前期	外川目下中居	平成15年試掘調査。
20	下中居Ⅱ	散布地	縄文土器（晩期）	縄文晩期	外川目下中居	
21	豪の前館	城館跡	平場・帯郭・柱穴列・唐津産碗・永楽通宝	中世	外川目下中居	昭和63年調査。
21	馬場長根	集落跡	竪穴住居・縄文・弥生土器（前・中期）	縄文前・中期、弥生	外川目下中居	平成元年調査。
22	本宿	散布地	縄文土器	縄文	亀ヶ森本宿	
23	上の台	散布地	縄文土器（前期）・石器	縄文	大迫上の台	



第３図　周辺の遺跡

Ⅲ　野外調査・室内整理の方法

1　野　外　調　査

野外調査は、はじめに機材搬入、雑物撤去、草刈を行い、調査区現況を写真撮影した。次に調査区内に数ヵ所の試掘トレンチを設定して人力により掘削、上層堆積の状況と遺構・遺物の有無を確認した。表土除去は重機を中心に行い、一部は人力作業で補った。

調査区に世界測地系の座標値に沿って５×５ｍのグリッドを設定した。そのグリッドに則って遺構の平面的配置の把握を行った。

表土除去の後、遺構検出作業を行っている。遺構検出作業で平面的な検出が困難な地点や遺構については、適宜小トレンチを設けて掘り、断面による土層の把握を行いながら調査を進めた。また風倒木や撹乱坑によるものと思われる痕跡についてもトレンチを設定して掘削し、断面によりその状況を確認した。

検出した遺構の精査は、竪穴住居跡については４分法、その他の遺構については４分法、２分法などを規模・形状に合わせて選んで用いた。また、遺構埋土の掘削に際しては、層位を意識して遺物を取り上げるよう努めた。さらに微細遺物のあると考えられる堆積土については土壌を持ち帰り、洗浄・選別・抽出作業も行った。

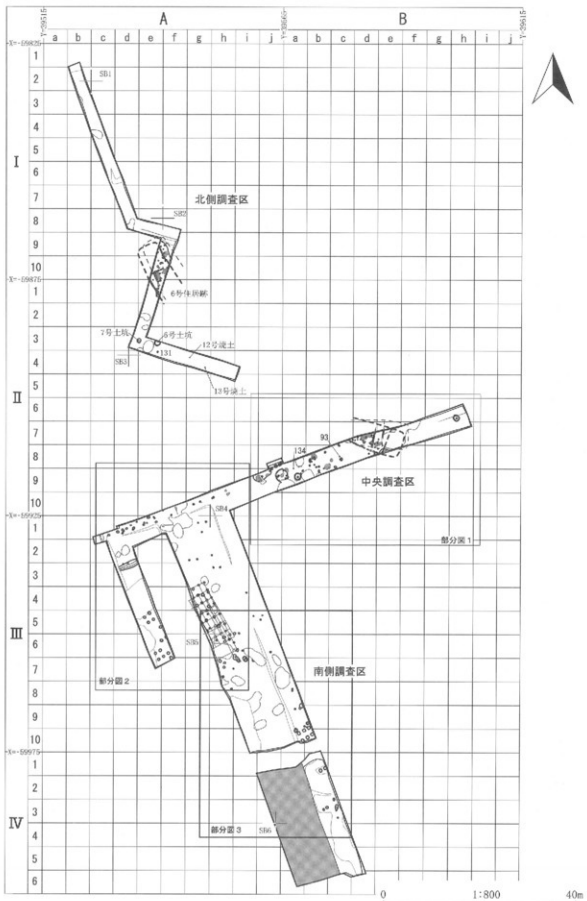
遺構平面図は、電子平板を用いて実測及び作図した。なお、遺構断面図は遺構の種類や規模などを考慮し20分の１、10分の１などの縮尺で作成した。

遺構の写真撮影は、デジタル一眼レフカメラ、中判カメラ（モノクロ）による撮影を基本とした。撮影のときには、当センター所定の撮影カードの記入と写し込みを行い、撮影写真の整理に利用した。

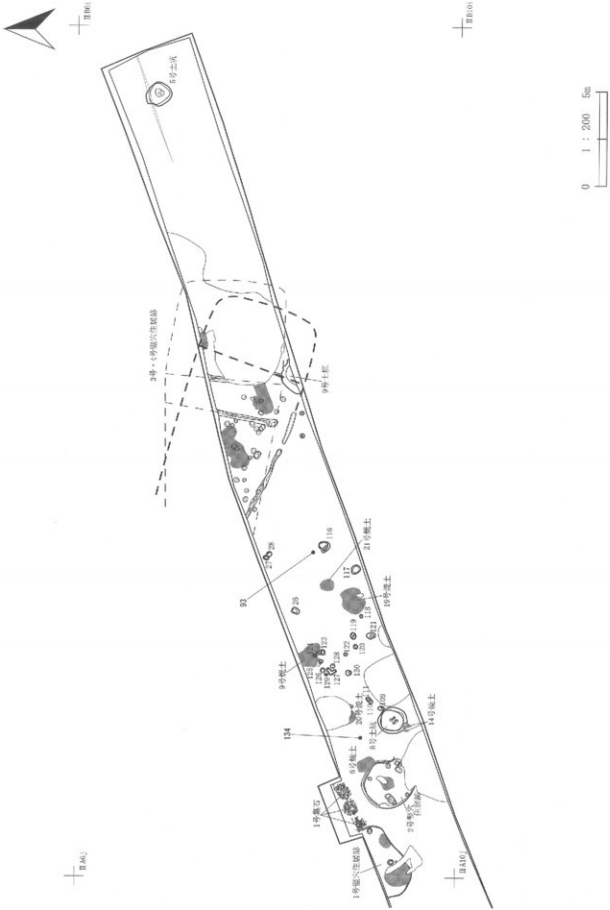
2　室　内　整　理

発掘調査終了時に作成し、点検を済ませた遺構の実測図は必要に応じて合成図を作成し、デジタル図化している。遺構等の写真は、アルバムに整理した。本書に掲載する遺構写真は、選択した後にデジタル写真を使って写真図版用に版下を作成した。

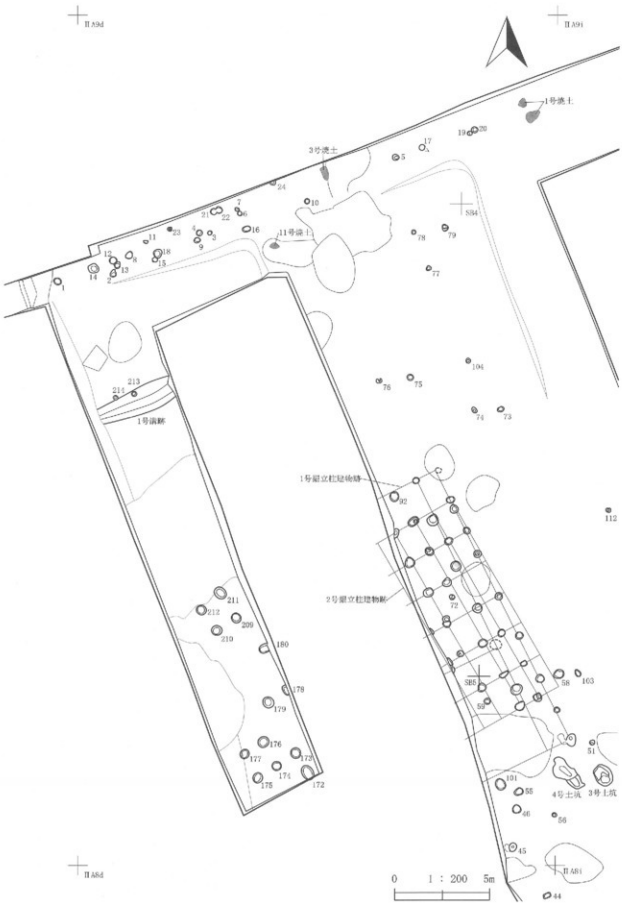
遺物は洗浄と注記をし、接合作業を行い、必要なものには石膏を入れて立体的に復元した。これらの中から遺跡を代表する遺物を選択し、実測作業と写真撮影を行っている。遺物の中には実測作業を行わず写真掲載のみの資料もある。遺物の実測作業は、原寸での実測を基本とした。実測した遺物は、トレースして図版用の版下を作成した。また、縄文土器や銭貨は拓本もとった。遺物の写真撮影はデジタルカメラを用いて行い、データを編集し写真図版として掲載している。すべての処理が終了した遺物は、報告書掲載遺物と不掲載遺物とに分けて所定の場所に保管している。


A
B
a b c d e f g h i j
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
北側調査区
中央調査区
南側調査区
SB1
SB2
SB3
SB4
SB5
SB6
6号住居跡
7号土坑
8号土坑
12号溝土
13号溝土
93
134
131
部分図1
部分図2
部分図3
0
1:800
40m

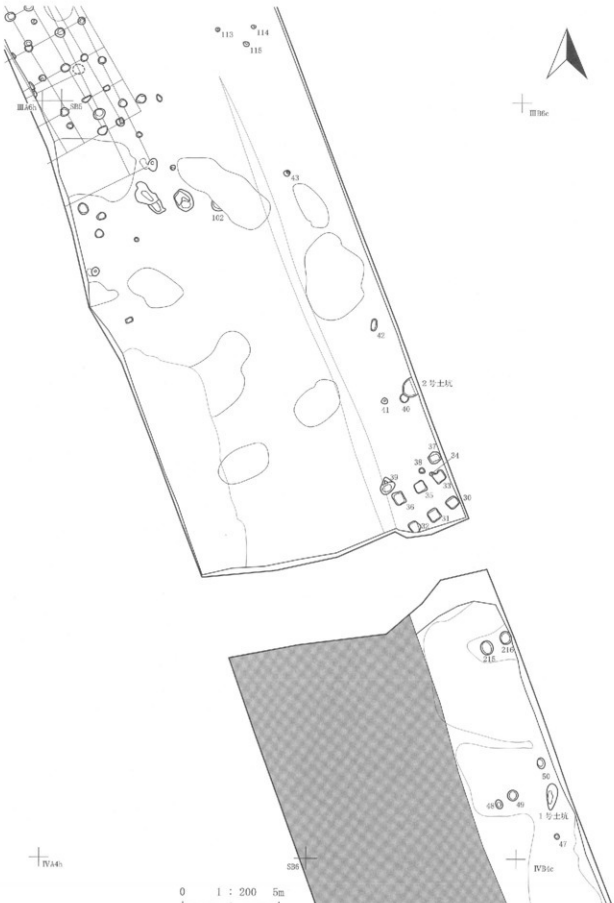
第４図　グリッド配置図



第５図　遺構配置図１


Ⅱ A9d
Ⅱ A9i
1号淡土
3号淡土
11号溝土
SB4
1号溝跡
1号掘立柱建物跡
2号掘立柱建物跡
SB5
4号土坑
3号土坑
Ⅱ A8d
Ⅱ A8i
0　1：200　5m

第６図　遺構配置図２



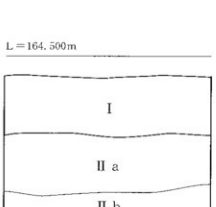
113
114
115
IIIA6b
SB6
IIIB6c
43
102
42
2号土坑
41
40
37
34
38
39
33
30
36
31
32
216
218
50
48
49
1号土坑
47
IVA4b
SB6
IVB4c
0
1 : 200
5m

第７図　遺構配置図３

Ⅳ　検出された遺構と遺物

1　基　本　層　序

今回の調査区のなかでも耕作による影響が比較的少ない中央部調査区の北部で基本土層の記録をとった。大別すると Ⅰ 層は現在の耕作土、Ⅱ層が旧表土で遺物包含層に相当し、Ⅲ層が基盤層となる。かつては東から西に緩やかに低くなる斜面地形であった。戦後間もなく行われた田面造成によりⅡ層が全くない部分も多く、そうした場所には Ⅰ 層の中に遺物が散在する。Ⅲ層も造成時に削平された部分もある。遺構はⅡ層から掘り込まれているようだが、Ⅱ層では検出できなかった。Ⅲ層まで掘り下げる中で遺構を検出している。そのため、Ⅲ層まで掘り込まれなかった遺構に関しては検出できなかった可能性がある。



第８図　基本土層模式図

2　竪穴住居跡

北側調査区から中央調査区にかけて縄文時代の竪穴住居跡が分布している。野外調査の段階では６棟の竪穴住居跡からなると考えていたが、３～５号竪穴住居跡は２棟の建て替えであると解釈し、３・４号竪穴住居跡に変更し５号竪穴住居跡は欠番とした。６号竪穴住居跡は建て替えを行っていることが判明し、こちらには新たに遺構名を付けずに古段階・新段階と分けて記載することとした。

１号竪穴住居跡（第９図、写真図版６）

［位置・検出状況］緩斜面地形の中央調査区ＩＢ９ｊグリッドに位置し、Ⅳ層面で検出した。

［重複関係］なし。

［規模平面形］北側が調査区外にあるため全容は不明である。北東－南西方向で3.94m、北西－南東方向は1.55mまでを検出した。平面形は円形を基調としていると思われる。

［床・壁］底面はややでこぼこしている。特に周囲より硬くしまった部分はなく、貼床も施されてはいない。壁はやや外傾して立ち上がるが、地形的に低くなる南側の壁は５㎝未満しか検出できなかった。

［埋土］黒褐色土が主体の自然堆積と見られる。１層は基本土層のⅡ層に対応し、Ⅲ層（縄文時代の遺物包含）は削平により失われている。本来であればⅡ層面から掘り込まれていた遺構と考えられる。

［柱穴・周溝］北東側及び南側で合わせて２個の柱穴を確認した。周溝は認められなかった。

［炉］南側の壁際に２基の焼土の広がりを検出したため、本遺構と関連のあるものととらえた。

何れの焼土も黒褐色土・黄褐色土ブロックを多量に含んでおり、別の場所で焚かれた焼土の可能性がある。

［出土遺物］床面から出土したものはない。
［時期］縄文時代であるが、詳細な時期は分からない。

2号竪穴住居跡（第9図、写真図版7）
［位置・検出状況］緩斜面地形の中央調査区ⅡB9aグリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。
［重複関係］ない。
［規模平面形］南側の一部を撹乱で失っているが、南北方向で2.75m、東西方向で2.53mを測る。平面形は円形で床面積は5.3㎡と推測される。
［床・壁］底面は厚さ3～10cmの貼床状になっていた。壁はやや外傾して立ち上がるが10cm前後しか残っていなかった。
［埋土］暗褐色土を主体とする自然堆積と思われる。
［柱穴・周溝］壁際を中心に9基の柱穴を検出したが、規模や配置に統一感は見出せない。南東側の柱穴の中には本遺構に伴わないものもあるかもしれない。周溝は北壁には確認できたが、南半部では検出できなかった。
［炉］住居中央部に75×72cmの焼土の広がりがある。その上に長さ65cmの河原石がのるが、この河原石の表面はあまり焼けていないため炉には伴わない可能性がある。本住居跡を検出した際、既にこの河原石と焼土が見えていた。つまり確認された床面よりも炉を成す焼土のほうが高い場所で検出されたのである。精査したところ、よく焼けた明赤褐色焼土が約10cmの厚さをもって残っており、床面まで達していた。このことから本遺構が使用されていく中で床および炉の位置が高くなっていった可能性がある。
［出土遺物］埋土から縄文土器1袋、石錘1点、敲石1点、剥片2点が出土した。
［時期］縄文時代前期

3号竪穴住居跡（第10・11図、写真図版8）
［位置・検出状況］緩斜面地形の中央調査区ⅡB7dグリッドに位置し、Ⅲ層で炉跡の焼土を、Ⅳ層で周溝や柱穴の検出をした。本遺構周辺はⅢ層（黒褐色土）の残りがよく、任意にベルトを設定し、平面・断面からⅢ層面での遺構検出を試みた。Ⅲ層下位で炉跡（焼土）は検出できたが、住居のプランは把握できずⅢ層を除去してさらに遺構検出を行ったところ周溝を検出できた。柱穴は更に少しドげてⅣ層面で検出したものが殆どである。
［重複関係］4号竪穴住居跡と重複し、本遺構のほうが古い。
［規模平面形］長軸が南東－北西となる大形住居を想定している。短軸は約5.7mと考えたがあまり根拠はない。
［床・壁］残りが悪く断言はできないが、褐色土を主体とした土で貼床としていたようである。その厚さは10cm程である。壁は4号竪穴住居跡との重複もあることから残っていない。
［埋土］炭粒・焼土粒を微量含む灰黄褐色土で人為堆積と見られる。
［柱穴・周溝］柱穴は本遺構に伴うのか4号竪穴住居跡に伴うのか判然としない。周溝は短軸方向を間仕切りするような溝が2条検出された。7・10号焼土に挟まれた周溝の南端部をもって本遺構の南辺部と考えている。
［炉］8号焼土が本遺構に伴う炉跡で北側は調査区外に続いている。焼土の厚さは7cm程ある。
［出土遺物］4号竪穴住居跡と重複しているため、本遺構に確実に伴う遺物というものはない。

［時期］本遺構から４号竪穴住居跡へと建て替えがなされたと解釈しており、４号竪穴住居跡とほぼ同時期の縄文時代前期と位置づけられる。

４号竪穴住居跡（第10・11図、写真図版８）

［位置・検出状況］緩斜面地形の中央調査区ⅡＢ７ｄグリッドに位置している。本遺構周辺はⅢ層（黒褐色土）の残りが良かったため、任意にベルトを複数設定し、平面・断面からⅢ層面での遺構検出を試みた。少しずつ掘り下げていきⅢ層下位で炉跡（焼土）を検出できたが、住居のプランは把握できずⅢ層を除去してさらに遺構検出を行った。この段階で周溝を検出できた。柱穴は更に少し下げてⅣ層面で検出したものが殆どである。

［重複関係］３号竪穴住居跡と重複し、本遺構のほうが新しい。

［規模平面形］長軸が南東－北西となる大形住居を想定している。短軸は約5.7ｍと考えたがあまり根拠はない。

［床・壁］３号竪穴住居跡の埋土が本遺構の床となる。炭粒や焼土粒の混じる人為堆積と見られる土なので貼床とみることもできる。壁の立ち上がりは把握できなかった。

［埋土］土器片を少量含む黒褐色土で、Ⅲ層と区別が難しい。

［柱穴・周溝］柱穴は本遺構に伴うのか３号竪穴住居跡に伴うのか判然としない。周溝は南側にある北西－南東方向に延びる溝が本遺構南辺を巡る周溝とみた。

［炉］７・10号焼土が本遺構の炉跡である。何れも地床炉でよく焼けた焼土面が広がり、その場で火を焚いた様相を良く留めていた。

［出土遺物］土器類は９号袋で約２袋分出土している。石器類は石鏃１、磨石４、敲石５、打製石斧？11、石製品４、石錘２、剥片20点が出土している。縄文時代前期中葉頃の土器が主体であるが、前期初頭頃の羽状縄文を持つ土器も微量であるが含まれている。

［時期］縄文時代前期

６号竪穴住居跡（第12～14図、写真図版10・11）

［位置・検出状況］緩斜面地形の北側調査区、ＩＡ10ｅグリッドに位置しⅣ層面で検出した。

［重複関係］本遺構には建て替えが見られる。以下古段階、新段階に分けて記載する。

古段階

［規模平面形］幅は18号焼土と重複する溝からＰ168までと考え約5.7ｍと推定した。長さは調査区内には４ｍのみで両端ともに調査区外へと続いている。北西－南東方向に長軸を持つ大形住居を想定している。北西端部は遺跡現況の地形が急に下がることから、これ以上は延びないと考えた。南端部は不明である。

［床・壁］Ⅳ層面をそのまま床としていたようである。Ⅳ層の中でも小礫混じりの層でこれ以上は掘り下げることは不可能であったと推察される。床面はかなり汚れていた。壁は残っていない。

［埋土］新段階へすぐに建て替えられたようで古段階のみの埋土はない。

［柱穴・周溝］調査区が限られているために配置を把握することは難しい。特に新段階と重複する部分にある柱穴はどちらのものか分からない。周溝は途切れ途切れでしか残っていない。

［炉］15号焼土はこの段階に伴い、16・17号焼土はどちらに伴うか判然としない。

新段階

［規模平面形］南西端の溝から15号焼土と重複する溝までの5.22ｍを幅と考えた。長さは不明で、調

査区内には４m程しかない。古段階と同様に北西－南東方向に長軸を持つ大形住居を想定している。北西端部は現況の地形が急に一段下がっていることから、これ以上は延びないと判断した。南端部は地形に特徴がなく不明である。

［床・壁］Ⅳ（砂礫）層を床面としている。貼床ではない。壁は南西側にのみ残っており、底面からやや外傾して立ち上がっている。

［埋土］小石・土器細片・地山ブロック等を不規則に含む黒褐色土や暗褐色土からなる。人為堆積の可能性がある。

［柱穴・周溝］調査区が限られているためその配置を理解することは難しい。古段階と平面的に重なる部分にあるものはどちらに属するのか分からない。周溝は壁際に掘られたものと、短軸方向を間仕切りするように掘られている溝とがある。

［炉］18号焼土がこの段階に伴う。16・17号焼土はどちらに伴うか判然としない。

［出土遺物］18号焼土周辺の床面付近を中心に多くの遺物が出土した。残りの良い遺物は殆どこの段階に属するであろう。縄文時代前期の土器が中コンテナ３箱、敲磨石４、礫石６、石錘６、石斧未製品１点、剥片も多く出土した。

［時期］縄文時代前期

3　掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第15図）

［位置］遺跡中央やや西側にあたるⅢＡ４ｇグリッド、南西に面した緩斜面地形に立地する。

［重複関係］２号掘立柱建物跡と平面的には重なるが、建物を構成する柱穴には重複がなく、新旧関係は不明である。

［平面形式］掘立柱建物である。桁行き７間（15908㎜）、梁行きは調査区外に延びているため不明である。面積は正確には計測できないが、およそ125.3㎡（40坪）である。

［建物方位］Ｎ－26°－Ｗ

［柱穴］上屋柱の柱穴は大きく深いのに対し、下屋柱の柱穴は小さく浅いものが多い。明瞭な抜き取り痕跡を有するものはなかった。柱痕もはっきり検出できる柱穴は少なくP84のみであった。柱痕や柱穴下端径などから上屋柱で18～20cm、下屋柱で15cm前後の柱が用いられていたと推測される。

［柱間寸法］桁行きは6.0尺、7.5尺、8.0尺、9.0尺が用いられているが、平均は7.5尺である。上屋柱－下屋柱間は4.0尺であった。P98の存在から室内を２つに分けていたと考えられ、梁間は２間（18尺）の２面に幅４尺の下屋柱が配される建物と推察した。

［出土遺物］銭貨「永楽通宝」が出土している。

［時期・建物の性格］出土遺物や間仕切りの少ない建物であることから中世末から近世初頭の民家（母屋）と考えられる。

2号掘立柱建物跡（第16図）

［位置］遺跡中央やや西側のⅢＡ４ｇグリッド、南西に面した緩斜面に立地している。

［重複関係］１号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴の切り合いはなく新旧関係不明である。

［平面形式］掘立柱建物である。桁行き1136l㎜（37.5尺）、梁行き4332㎜（14.3尺）以上である。梁行きは調査区外へ延びているため詳細は不明である。総柱建物の可能性が高い。所々で柱穴を欠くが

全体的に残りが悪く、可能性の高い場所を中心に柱穴をかなり探したが検出できなかった。
［建物方位］Ｎ－30°－Ｗ
［柱穴］明瞭な抜き取り痕跡や、柱痕をはっきり検出できる柱穴は少ない。柱穴が掘えられていた場所は一段深くなっていることから、径15cm前後の柱が用いられていたようである。
［柱間寸法］桁行き方向は5.９～6.６尺と一定ではないが6.25尺で概ね割り切れるようである。桁行きはほぼ真っ直ぐに柱穴が並んでいる。梁行きは2.９尺～4.７尺と桁行きより短い間尺で構成されている。平均約3.６尺である。
［時期・建物の性格］１号掘立柱建物跡との新旧関係は不明であるが、建物の構造から本遺構のほうが新しいという印象を持つ。よって近世前半以降の建物と位置付けたい。

４　土　　坑

９基の土坑が見つかっている、何れの土坑も地山面で検出している。各遺構の規模（計測値）は検出面での長軸×短軸×深さ（cm）で記載した。

１号土坑（第17図）
［位置・検出状況］南側調査区の斜面部、ⅣＢ３ｃグリッドで検出された。
［規模・形状］138×58×43cmの不整楕円形である。底面は狭いが概ね平坦であった。
［埋土］地山ブロック・小礫を少量含む暗褐色土。自然堆積と思われる。
［出土遺物・時期］出土遺物がなく時期も不明である。

２号土坑（第17図、写真図版12）
［位置・検出状況］ⅢＢ９ａグリッドの緩斜面部で検出された。
［規模・形状］97×（71）×26cmで北東側は調査区外へ続いている。底面は平坦ではない。
［埋土］黒褐色土の単層で自然堆積と思われる。
［出土遺物・時期］出土遺物はない。埋土の状況から近世より古い遺構である。

３号土坑（第17図、写真図版12）
［位置・検出状況］ⅢＡ７ｉグリッドの緩斜面部で検出されている。
［規模・形状］113×91×33cmの不整形である。底面は平坦ではない。
［埋土］小礫を少量含む黒色土で自然堆積と思われる。
［出土遺物・時期］遺物は出土しておらず時期も不明である。

４号土坑（第17図、写真図版12）
［位置・検出状況］緩斜面地形のⅢＡ７ｉグリッドに位置している。
［規模・形状］205×85×28cmの不整長円形をしている。底面は南東に向け段が付きながら浅くなっている。
［埋土］小礫を少量含む黒褐色土で自然堆積と思われる。
［出土遺物・時期］土器細片２点が出土した。時期は不明である。

5号土坑（第17図、写真図版12）
［位置・検出状況］遺跡内でも高位にあたるⅡＢ５ｈグリッド、緩斜面地形に立地する。
［規模・形状］138×115×51cmの不整円形をしており、底面中央が一段低く掘り下がっている。壁は垂直気味に立ちあがる所もある。
［埋土］黒褐色土や暗褐色土の流れ込んだ自然堆積である。
［出土遺物・時期］縄文時代前期の土器片３点、礫石１点、剥片６点が出土した。縄文時代の貯蔵穴である。

6号土坑（第17図、写真図版13）
［位置・検出状況］緩斜面部、ⅡＡ３ｅグリッドに位置している。
［規模・形状］123×（90）×33cmで北側が調査区外に続いている。底面もやや凹凸がある。
［埋土］炭粒・焼土粒を少量含む人為堆積である。
［出土遺物・時期］縄文時代中期末から後期の土器細片１袋強、礫石・磨石３点が出土している。縄文時代の廃棄土坑であろう。

7号土坑（第18図、写真図版13）
［位置・検出状況］緩斜面部のⅡＡ３ｅグリッドで検出された。
［規模・形状］92×75×19cmの長円形である。底面は平坦ではない。
［埋土］自然堆積か人為堆積か不明である。
［出土遺物・時期］出土遺物はなく時期も不明である。

8号土坑（第18図、写真図版13）
［位置・検出状況］中央調査区（ⅡＢ９ａグリッド）の緩斜面部に立地する。
［規模・形状］152×132×89cmの円形で、断面はフラスコ状を呈する。底面は平坦で中央には４個の小柱穴（深さ20cm前後）が掘られている。
［埋土］黒褐色土、明黄褐色土、黒色土等が流れ込んだ自然堆積である。
［出土遺物・時期］縄文時代前期と中期の土器が0.25袋、掻削器片１点、礫石片１点が出土した。縄文時代の貯蔵穴である。

9号土坑（第18図）
［位置・検出状況］斜面部のⅡＢ８ｅグリッドにて検出された。
［規模・形状］190×（65）×52cmで南側は調査区外に延びている。底面は概ね平坦である。
［埋土］自然堆積である。
［出土遺物・時期］出土遺物なし。Ⅱ層より上面から掘り込まれた遺構ではないようなので縄文時代の遺構と位置付けたい。

5　焼　　土

中央・北側調査区から21箇所検出されている。この中には住居の炉跡も含んでおり、それを除くと11箇所の焼土を確認したことになる。各遺構の特徴は表に整理した。

第2表　焼土観察表　　計測値の単位：cm

遺構名	位置 グリッド	立地 検出面	規模 長軸．短軸．深さ	形状	被熱土・性格	出土遺物	時期
1号焼土	ⅢＡ９ｈ	緩斜面 Ⅱ層	48. 42. 16 82. 55. 18	不整形 不整形	明赤褐色焼土を主体とし、粒状に入ったりもする。現地性焼土。	縄文時代前期中葉土器１袋	縄文時代
3号焼土	ⅢＡ１ｇ	緩斜面 Ⅱ層	72. 35. 7	長円形	明赤褐色焼土。現地性。	なし	縄文時代
6号焼土	ⅡＢ９ａ	緩斜面 Ⅱ層	97. 68. 13	不整形	上位は黒色土に焼土ブロック、その下にはよく焼けた焼土面、現地性。	縄文時代前期土器２点	縄文時代
9号焼土	ⅡＢ８ｂ	緩斜面 Ⅱ層	143. 97. 9	不整形	上位が最も焼成が良い。南西側にある礫は焼けていない。現地性。	なし	縄文時代
11号焼土	ⅢＡ１ｆ	緩斜面 Ⅱ層	50. 31. 10	不整形	赤褐色焼土、風倒木に撹乱され残りが悪い。現地性焼土と思われる。	縄文土器１袋	縄文時代
12号焼土	ⅡＡ４ｇ	緩斜面 Ⅱ層	24. 23. 3	円形	赤褐色焼土。その場で焚いたのか廃棄焼土か不明。	なし	縄文時代
13号焼土	ⅡＡ４ｇ	緩斜面 Ⅱ層	52. 14. 2	長円形	その場で焚いたものか、廃棄された焼土か不明。	縄文時代後期初頭土器0.25袋	縄文時代
14号焼土	ⅡＢ９ａ	緩斜面 Ⅱ層	55. 30. 2	不整形 不整形	直径10cmに満たない明赤褐色焼土の周りに焼土粒が分布。現地性。	縄文時代前期土器１点	縄文時代
19号焼土	ⅡＢ８ｂ	緩斜面 Ⅱ層	141. 107. 20	不整形	明赤褐色焼土の上に焼土ブロックを含む黒褐色土がのる。現地性。	縄文時代前期土器７点	縄文時代
20号焼土	ⅡＢ８ａ	緩斜面 Ⅱ層	96. 30.	不整形	掘抗に殆ど壊されている。	なし	縄文時代
21号焼土	ⅡＢ８ｃ	緩斜面 Ⅱ層	74. 59. 2	不整円形	明赤褐色焼土。現地性。	なし	縄文時代

6　溝　　跡

1号溝跡（第18図、写真図版15）

中央調査区南端部に位置する。南西－北東方向へ延びており調査区内には4.7m程が検出されている。上幅は0.3～0.7m、深さは0.3m前後で底面は概ね平坦である。底面付近には廃棄された礫（径10～25cm）が多数見られた。出土遺物はなく時期決定の資料を欠くが、周辺の状況から古くても近世とみられ、古代や中世までは遡らないと思われる。

7　集　　石

1号集石（第20図、写真図版15）

［位置・検出状況］緩斜面地形の中央調査区、ＩＢ８ｊグリッドに位置しⅢ層最上面にて検出された。Ⅲ層の上は本来であればⅡ層（縄文時代）であるが、削平されＩ層となっている。集石はＩ層とⅢ層に挟まれたかたちで検出されている。

［規模・形状］集石は二つのまとまりとなって検出された。北東側の集石で85×60㎝、中央の集石は78×65㎝、南西側の集石が74×57㎝の広がりを持つ。

南西－南側へは広がらないようであるが、それ以外は調査区の外側になるため分からない。何れも無加工の河原石を主体としているが大きさや形状に統一感はあまりないかもしれない。長さ５㎝に満たない小形の礫から、長さ20㎝をやや超える礫までを円形基調に配置している。礫を厚く敷き詰めているわけではなく、礫の下に何の施設も持たない。

［埋土］Ⅲ層上面にのるが、上位面から掘り込まれた柱穴の根固め石の可能性も否定できない。柱穴の痕跡は認められなかったが、Ｉ層は現代の層であるため柱穴の痕跡は失われ根固め石だけが残ったとも解釈できる。

［出土遺物・時期］遺構に伴っての遺物はない。上述の考え方もできるが、検出面から縄文時代の遺構と捉えておく。

8　遺構外出土遺物

中近世の銭貨、近世及びそれ以降の陶磁器などがあり、縄文時代の遺物はＩＡグリッドの南側、ⅡＢグリッド、ＩＢグリッドの東側、ＩＣグリッドの北東側などからよく出土していた。特にＩＣ１ｈ～ＩＣ３ｉグリッドではⅡ層の残りが比較的よく、その中に縄文時代の遺物を包含していた。遺構の有無についても注意して精査を進めたが遺構は見つからず、遺物のみが出土する場、いわゆる捨て場の一部であったいえる。他のよく遺物が出土する地点は竪穴建物跡の周辺が多い。

以下、遺物ごとに内容を記していく。

縄文土器（第21～27図、写真図版17～21）

遺構内25565.64ｇ、遺構外62103.10ｇが出土している。調査区内における出土傾向については前述したとおりである。縄文時代前期・中期・後期の土器がみられ、最も多いのは縄文時代前期の土器である。全体の約８割はこの時期の土器に位置づけられそうで、次に中期（中期末）、後期と続くがその量は前期に比べたら極端に少なくなる。

まずはこれまでの土器編年を参考に時期ごとに大別した。それから文様の特徴ごとに細別し、本遺跡における土器分類として下記のように整理した。

分類ＩＡ１は量的には少ないものの、時期は最も古く位置づけられることから本遺跡で集落が営まれた初現を考える上で重要である。結束・非結束のもの、０段多条のものなどがあるが、細別はしなかった。何れも胴部の破片のみで口縁・底部は見つからなかった。分類ＩＡ２も数は少ない。49は不整撚糸文が縦方向に施される。50は口唇部端に刻目が入る。本類は大木２ａ式垈の上器であろう。分類ＩＢ１は今回の調査では分類ＩＢ４と共に最も多く出土している。口縁と胴部の境界部分に隆帯を

持つもので、51～58には隆帯に指頭圧痕を連続して施している。55～57にはそれに加えて、C字状の貼付が胴部に等間隔で配される。59では隆帯ではなく、縦横の沈線によって口縁部と胴部を区画している。60は2段の隆線の上に刻目文があり、胴部には沈線によるC字状の文様を付している。61は横沈線により1本の隆帯を2段に分けている。62・63は鋸歯状の貼付を持つもの（ＩＢ２）で口縁部に大きな貼付を持つ62と、胴部に小さな貼付を持つ63とがある。63に関しては天地左右の自信がない。分類ＩＢ３は沈線文、沈線と刺突文を持つものをまとめた。65は口縁と胴部を区切るように2本の沈線が引かれている。64は胴部に曲線的な沈線と直線的な刺突列を組み合わせて文様を構成している。前期よりも新しいものかもしれない。66～76・78・79は地文に撚糸文を持つものをまとめた。この中には胴部の破片などで、本来であれば何らかの文様を持っていた個体も含んでいる可能性がある。撚糸文の種類としては木目状撚糸文が最も多く、1本の縄で作るものと、2本1組のようにして作るものとがある。中央部を細い紐で固定しているものも多い（71や73など）。網目状撚糸文を用いるものが次に多い（76）。撚糸圧痕文（78）、網目状撚糸文の変種（79）等はごく少量である。分類ＩＢ５もその量は少ない。81は底部付近で櫛状の細い沈線を縦方向に引いたものである。　分類Ⅱは中期・中期末葉から後期初頭の土器をまとめた（82～90）。文様らしい文様をもたない82・84・85。山形口縁を基点に刺突や紐状の隆線、S字状連鎖沈線を施文しているもの（87～90）等がある。分類ＩＢに次いで今回の調査では多く出土しているが、全体の量からみれば1割強といったところである。91は後期前葉土器の蓋。92～94は小形の土器である。

土器分類

各　分　類			文様の特徴（縄分）など		量的な傾向
Ⅰ前期	A初頭～中葉	1　羽状縄文を施すもの	前期特有の羽状縄文、胎土に繊維多く含む		少ない
		2　口縁部に不整撚糸文を施すもの	口縁部のみで、休部の様相は不明		少ない
	B大木5式及びその前後の土器型式を若干含む	1　口縁と胴部の境に隆帯を貼り付ける		a　隆帯に指頭圧痕を連続してほどこす、加えて隆帯が体部へC字状の隆帯を展開させる	多い。今回の調査では主体をなす
				b　隆帯の文様がaとは異なるもの	量的には極めて少ない
		2　鋸歯状の貼付をもつもの	口縁部に貼り付けるもの、胴部に貼り付けるものとがある		少ない
		3　沈線、もしくは沈線と刺突で文様を構成するもの	沈線による文様が直線的なもの、曲線的なもの		量的には極めて少ない
		4　撚糸文のみを施しているもの	胴部の破片で、本来なら文様帯を持つかもしれないものも、本類の中に含めている		多い。今回の調査では主体
		5　縄文のみ、櫛描文のみを施す			少ない
Ⅱ中期	細分せず	主に中期末葉～後期初頭のもの	S字状連鎖沈線、磨消し縄文ほか		ＩＢ群に次いで多い
Ⅲ後期	細分せず	前葉のものが出土			1点のみ
その他	小形土器		文様なし		

各時期の量的な傾向は遺構内出土土器を含めても殆ど変わらない。

陶磁器（第27図、写真図版21）

その殆どが近世及びそれ以降のものである。95は擂鉢で内面の櫛目と櫛目の間に隙間があることから近世でも古くなる可能性がある。各個体の観察結果は表に整理した。

土製品（第27図、写真図版21）

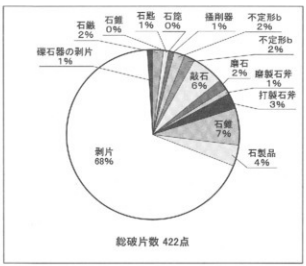
土製品は石製品に比べて少ない。96は耳飾り、97は土製円盤である。

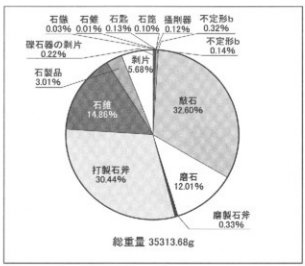
石器・石製品（第28～35図、写真図版23～30）

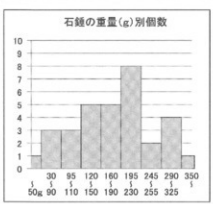
縄文時代の石器・石製品の出土状況に関しては縄文土器の出土状況と大きな違いはない。土器の出土する場所では石器類も出土する。前述したようにＩＣ１ｈ～ＩＣ３ｉグリッドではⅡ層の残りが比較的よく、その中に縄文時代の遺物が他よりも多く包含されていた。石器類もここから一定量出土している。この他にⅡＢ８ｃ・８ｄグリッド付近では剥片がまとまって出土していた。ここでは遺構は未検出であったが３～５号竪穴住居跡にも近く、石器製作の場であった可能性も指摘できよう。また、今回の調査では遺構内外をとおして石錘の出土が目立った。それから石製品の未製品も多く見られた。これらの資料は本遺跡（縄文時代前期）の集落での生業を考察する上でも重要で第Ⅴ章で改めて触れたい。

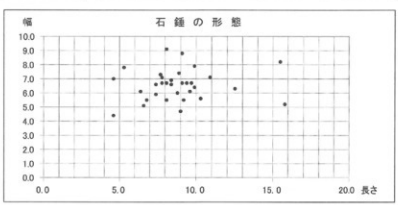
石器・石製品分類表

A 剥片石器	Ⅰ　石鏃	a　完形品	1　凸基	2　凹基	3　不明ほか					
		b　未製品	1　凸基	2　凹基	3　不明ほか					
	Ⅱ　石錐	出土しなかった。								
	Ⅲ　石匙	a　縦長								
		b　横長								
	Ⅳ　石篦	剥片石器の石材	1　刃部一部	2　一部ない部分有り	3　中まで剥離が及ぶもの					
	Ⅴ　掻・削器・不定形石器	a　一般的な掻・削器								
		b　押圧剥離系列の石器を製作する過程でできる剥片に使用してできた痕跡があるもの								
		c　押圧剥離系列の石器を製作する過程でできる剥片に簡単な加工を施しているもの								
		d　ピエス・エスキーユ								
		e　磨製石斧や礫石器によく使われる石材を用いているもの								
B 礫石器	Ⅵ　敲石	a　一般的な敲石	1　片手で持てる通常の敲石	2　板状で縁辺に敲打痕	3　永く棒状	4　掌に隠れる程度の小さなもの	5　その他			
		b　多面体石器	1　掌にすっぽりと収まるもの	2　片手で握れるもの	3　大型					
	Ⅶ　砥石	a　棒状の一般的な砥石								
		b　それ以外のもの								
	Ⅷ　凹石	a　片手でもてる一般的なもの								
		b　その他	1　細長いもの	2　掌に収まる小石状	3　その他					
	Ⅸ　凹石									
	Ⅹ　台石		1　最大長20㎝以下	2　20～30㎝	3　30㎝以上					
	ⅩⅠ　石皿	出土しなかった								
	ⅩⅡ　磨製石斧	a．完形品	細分しなかった							
		b．未製品	0　原石	1　剥離段階	2　敲打段階	3　研磨段階				
	ⅩⅢ　打製石斧？	細分しなかった								
	ⅩⅣ　その他									
C 剥片・残核	ⅩⅤ　剥片・残核	a　押圧剥離系列の石器製作時に出る剥片								
		b　押圧剥離系列の石器に使用されるような石材の残核								
	ⅩⅥ　剥片・残核	a　礫石器、石製品系列の作成時に出る剥片								
		b　礫石器、石製品製作に使用されるような石材の残核								
D　石製品ほか		ⅩⅦ　石棒・石剣類	ⅩⅧ　石製円盤	ⅩⅨ　石錘	その他					







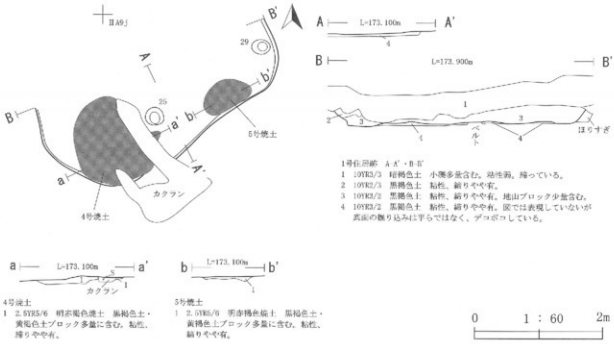


石器類は上記のように分類し、その数量を整理した。個々の内容は表にまとめている。

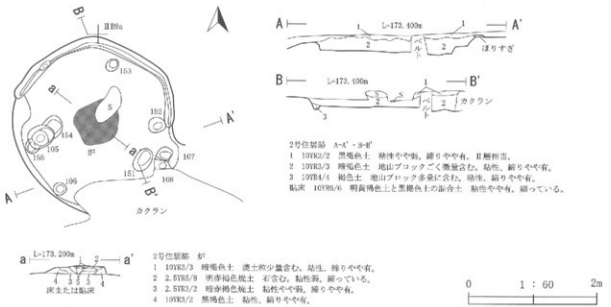
剥片石器を製作した際に出た剥片類が多く出土している。前述したが、まとまって出土した地点もある。こうしたことから集落内で剥片石器（石材は北上山地、奥羽山脈のものがある）の製作が行われていたことを示す事象といえよう。但し、敲石・磨石といった礫石器に比べると剥片石器の数量は少ないことも本遺跡の特徴である。また磨製石斧の出土も極めて少なかった。これはいかなる要因によるものなのか今後検討の必要がある。打製石斧に分類した、礫に粗く歯を付けた石器は敲石・磨石などと共に出土量も多い。今回の調査で得られた石器類の組成で特筆されるものとしては石錘と石製品が多く出土していることであろう。石錘は小形軽量のものから比較的大形で重いものまである。その殆どが長円扁平な河原石の短軸方向を打欠いているもので、長軸方向を打欠いて４箇所の打欠部を持つものは見られない。重量が最小のもので20.28、最大のもので306.75ｇある。これほどの差のある石錘を同時に使用しているとは考えにくいし、全体的に本遺跡での石錘の重量や大きさにはばらつきが目立つ。実際の漁網に何個の石錘を用いていたのか推定できるような出方はしなかったので分からないが、川底までしっかりと沈まなければならないはずであるから、軽いものよりは重いものの方が有効と思われる。仮に石錘の重量や形態が近似しているものによって魚網ができていたと考えるならば、本遺跡の場合は195～230ｇの石錘を中心用いた漁網とそれよりも軽いの石錘を用いた漁網と逆に重い石錘を使う複数の漁網が存在していた可能性があるかもしれない。形体でみると長さ６～10㎝、幅５～7.5㎝の範囲に入るものが多く、最も使いやすい形態の傾向が窺われる。

石製品については石棒・石剣類のような細長く加工しようとしているもの円盤状に加工しているもの垂飾等があり、その殆どは未製品であった。この件については次章で扱いたい。

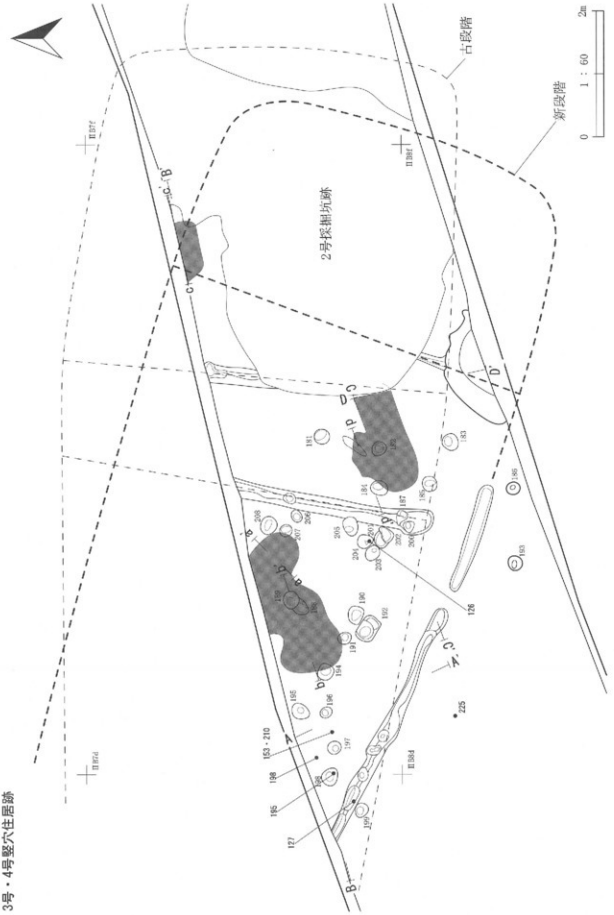
1号竪穴住居跡



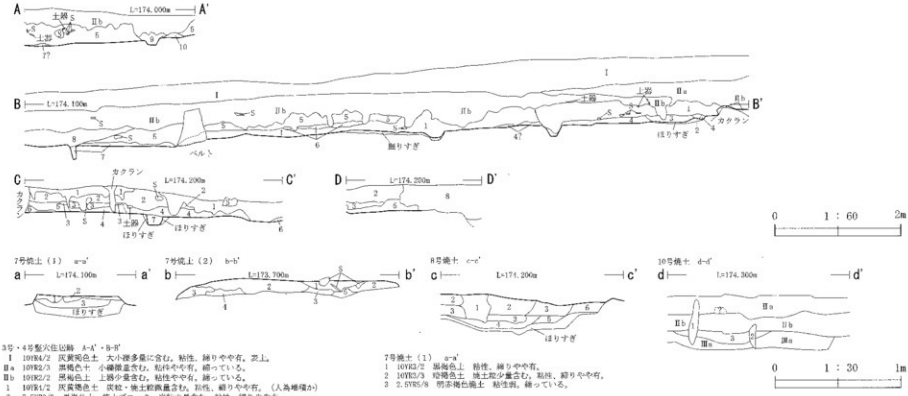
2号竪穴住居跡



第９図　１・２号竪穴住居跡



第10図　3・4号竪穴住居跡（1）



3号・4号竪穴住居跡 A-A'・B-B'

Ⅰ 10YR4/2 灰黄褐色土 大小礫多量に含む。粘性、締りやや有。炭上。
Ⅱa 10YR2/3 黒褐色土 小礫微量含む。粘性やや有。締っている。
Ⅱb 10YR2/2 黒褐色土 上器少量含む。粘性やや有。締っている。
1 10YR1/2 灰黄褐色土 炭粒・焼土粒微量含む。粘性、締りやや有。（人為堆積か）
2 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土ブロック・炭粒少量含む。粘性、締りやや有。
3 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性弱。締っている。（炉）
4 10YR4/4 褐色土 粘性やや有。締っている。（貼床か）
5 10YR3/2 黒褐色土 土器片少量含む。粘性、締りやや有。
6 5YR4/8 赤褐色焼土 粘性弱。締っている。
7 10YR1/4 褐色土 地山ブロック微量含む。粘性、締りやや有。
8 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロック微量含む。粘性、締りやや有。
9 10YR2/3 黒褐色土 地山ブロック少量含む。粘性やや有。締り弱。
10 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック微量含む。粘性、締りやや有。

3号・4号竪穴住居跡 C-C'・D-D'

1 10YR2/2～2/3 黒褐色土が混じっている。粘性、締りやや有。（Ⅱ層相当か）
2 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒・炭粒・地山ブロック多くく微量含む。粘性、締りやや有。
3 5YR5/8 明赤褐色焼土（炉） 粘性弱。締っている。
4 10YR4/4 褐色土 地山ブロック不規則に含む。粘性、締りやや有。
5 10YR3/2 黒褐色土 粘性、締りやや有。（2層上と似ていた）
6 10YR3/3 暗褐色土と炭褐色土が混じり合っている。粘性、締りやや有。
7 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック微量含む。粘性やや有。締りやや弱。
8 10YR2/2 黒褐色土 地山ブロック多不規則に少量含む。粘性、締りやや弱。（上坑国係の堆積）
※他の住居との切り合い関係は見分けられない。

7号焼土（1） a-a'

1 10YR3/2 黒褐色土 粘性、締りやや有。
2 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒少量含む。粘性、締りやや有。
3 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性弱。締っている。

7号焼土（2） b-b'

1 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性やや弱。締っている。
2 10YR5/3 に芯い黄褐色土 焼土ブロック多量に含む。粘性、締りやや有。
3 10YR3/3 暗褐色土 粘性、締りやや有。
4 10YR5/3 に芯い黄褐色土 粘性やや有。締っている。
5 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒少量含む。粘性、締りやや有。

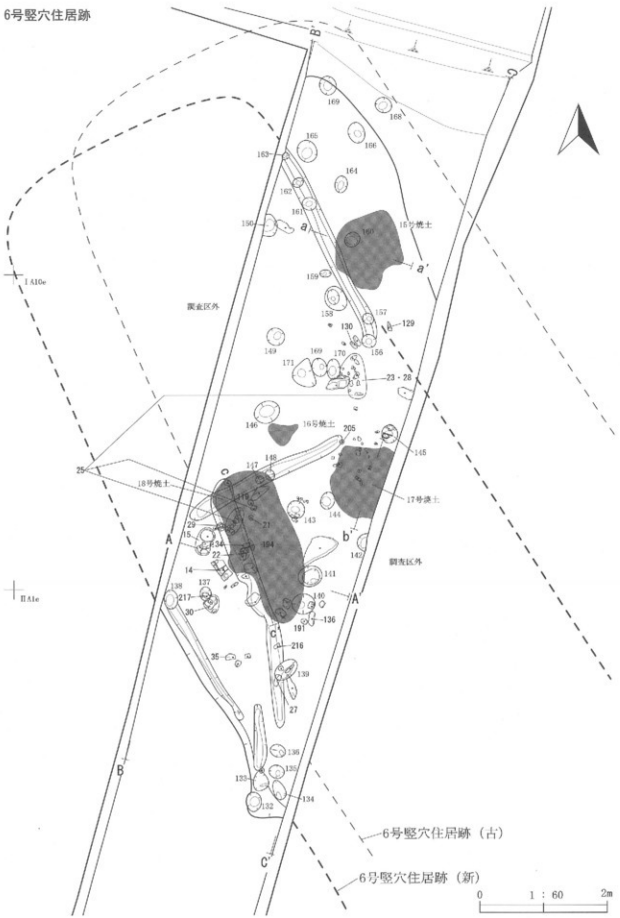
8号焼土 c-c'

1 10YR2/1 黒色土 焼土ブロック多量に混じる。粘性やや有。締り弱。（カクラン）
2 10YR3/4 暗褐色土 粘性、締りやや有。
3 10YR3/4 暗褐色土 焼土ブロック大量に含む。粘性やや弱。締りやや有。
4 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性弱。締っている。
5 10YR5/4 に芯い黄褐色土 4層に近い所ほど明赤褐色を呈する。粘性やや有。締っている。
6 10YR3/3 暗褐色土 粘性、締りやや有。

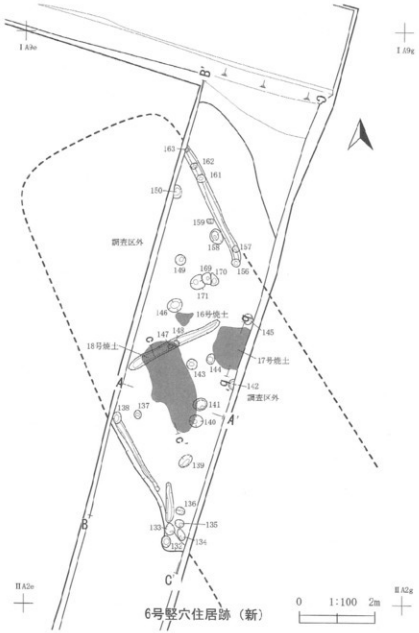
10号焼土 d-d'

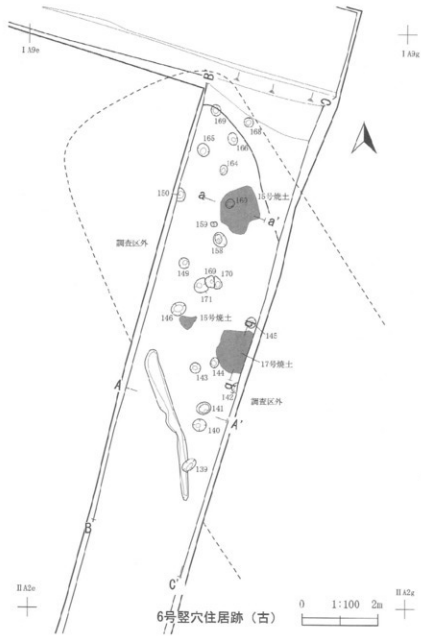
Ⅱa 10YR2/1 黒色土 粘性、締りやや有。
Ⅱb 10YR2/1 黒色土 粘性、締りやや有。3層の上に焼土粒が少量見られる。
Ⅲa 10YR3/4 暗褐色土 粘性やや有。締っている。
1 10YR2/1 黒色土 粘性、締り弱。
2 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒少量含む。粘性、締り弱。
3 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性弱。締っている。

第11図 3・4号竪穴住居跡（2）

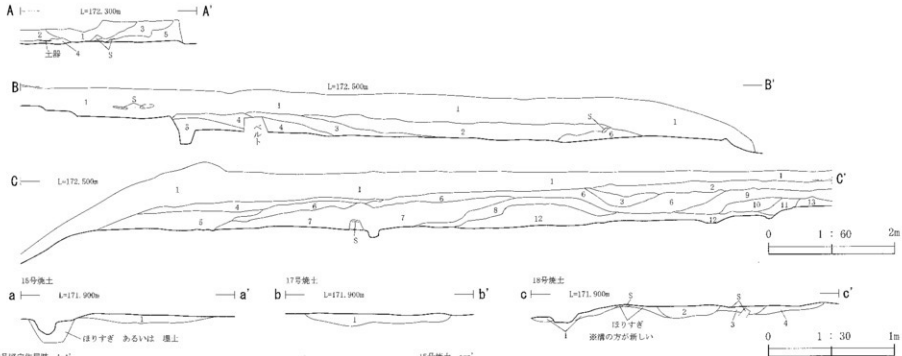


第12図　6号竪穴住居跡（1）





第13図　6号竪穴住居跡（2）



6号竪穴住居跡（3）

第14図 6号竪穴住居跡

6号竪穴住居跡 a-a'

1 10YR3/2 黒褐色土 炭粒・小礫被覆含む。粘性、締りやや有。
2 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒少量含む。粘性、締りやや有。B-Bの4層と同じ。
3 10YR5/6 明黄褐色土 小礫を多量に含む。粘性やや有。締っている。
4 10YR2/2 黒褐色土 小礫を少量含む。粘性、締りやや有。B-Bの5層と同じ。
5 10YR2/2 黒褐色土 暗褐色土及び小礫が混じる。特に小礫は多量に含む。粘性やや有。締っている。
床面 黄褐色ローム層確である。小礫多量。

6号竪穴住居跡 B-B'

1 10YR3/3 暗褐色土（撹乱土） 粘性やや有。中小の礫を多く含む。締りやや有。
2 10YR2/2 黒褐色土 小礫を多量に含む。粘性、締りやや有。
3 10YR2/3 黒褐色土 中小礫炭粒少量含む。粘性、締りやや有。
4 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒少量含む。粘性、締りやや有。A-A'の2層と同じだが焼土はこちらまで広がらない。
5 10YR2/2 黒褐色土 小礫を多く含む。粘性、締りやや有。A-A'の3層と同じ。
6 10YR3/4 暗褐色土 小礫を多く含む。粘性、締りやや有。

6号竪穴住居跡 C-C'

1 10YR3/2 黒褐色土 水目の十、下位は地山ブロックを多量に含む床土。粘性やや有。締りやや弱。
2 10YR3/2 黒褐色土 小石を多量に含む。粘性、締りやや有。
3 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロック・小石を多量に含む。粘性やや弱。締っている。
4 10YR3/1 黒褐色土 小石を多量に含む。粘性、締りやや有。
5 10YR3/3 暗褐色土 小石を多量に含む。粘性、締りやや有。
6 10YR2/2 黒褐色土 小石を多量に含む。粘性、締りやや有。
7 10YR3/2 黒褐色土 小石を多量に含む。遺物も多く入っている。粘性、締りやや有。
8 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロック、小石を多量に含む。粘性やや弱。締っている。
9 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロック・小石を少量含む。粘性、締りやや有。
10 10YR6/8 明黄褐色土 小石多量に含む。粘性やや有。締っている。
11 10YR2/3 黒褐色土 地山ブロック・小石を少量含む。粘性、締りやや有。
12 10YR3/3 暗褐色土 小石・遺物多量に含む。粘性、締りやや有。
13 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロック多量に含む。粘性、締りやや有。
床基本的に人為堆積。小石は地山起源。

15号焼土 a-a'

1 2.5YR4/8 赤褐色焼土 小石を多量に含む。（地山起源）粘性なし。締っている。

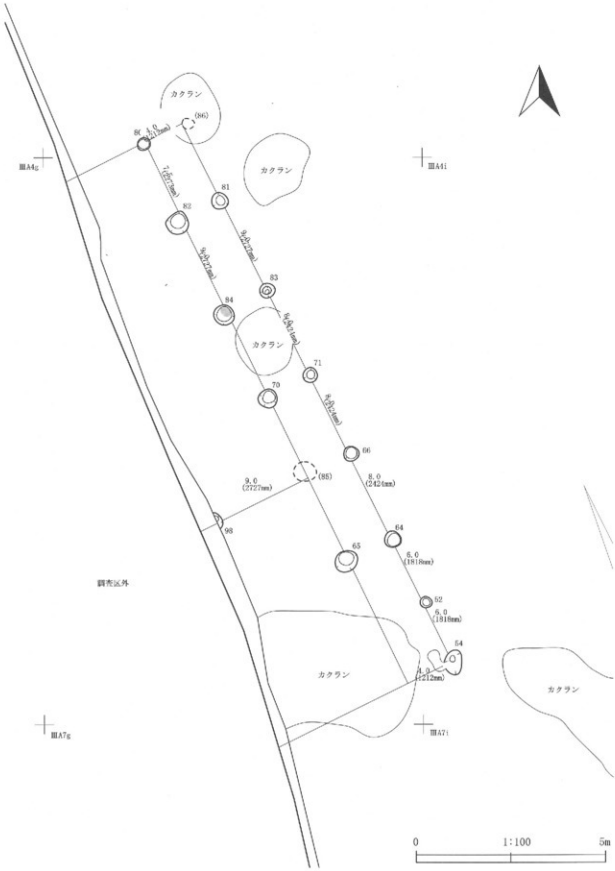
17号焼土 b-b'

1 2.5YR4/8 赤褐色焼土 粘性なし。締っている。

18号焼土 c-c'

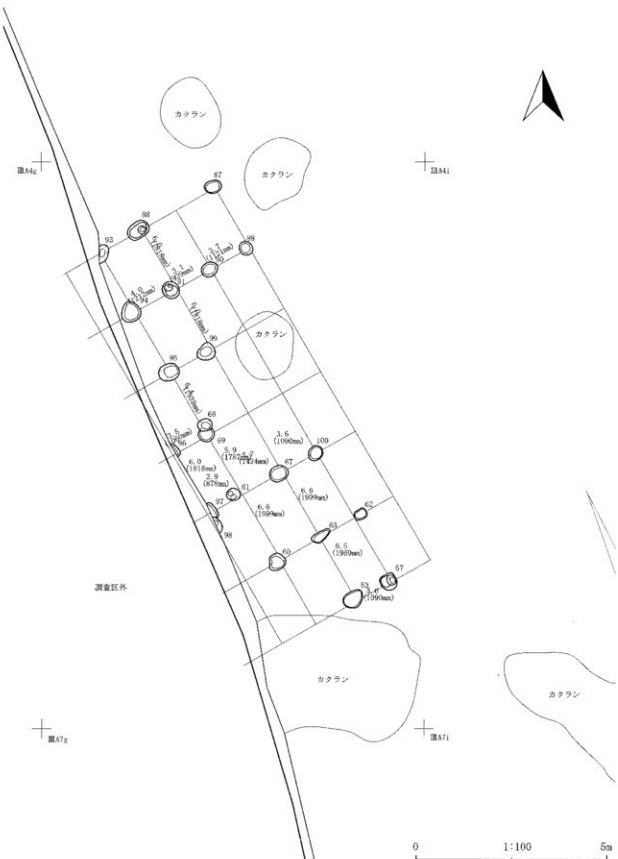
1 2.5YR5/6 明赤褐色焼土 粘性なし。締っている。
2 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性なし。締っている。
3 10YR7/4 にぶい黄橙色土 焼土粒少量含む。粘性、締りやや有。
4 10YR3/4 暗赤褐色焼土 粘性、締りやや有。

1号掘立柱建物跡



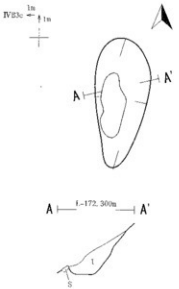
第15図　1号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡



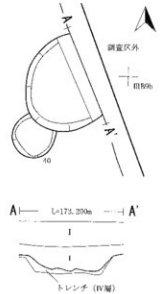
第16図　2号掘立柱建物跡

1号土坑



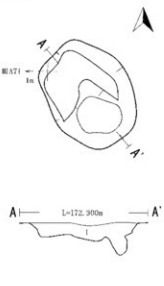
1号土坑
1　10YR3/3　暗褐色土　地山ブロック少量含む。
　上位には小礫が混じっている。粘性、締り有。

2号土坑



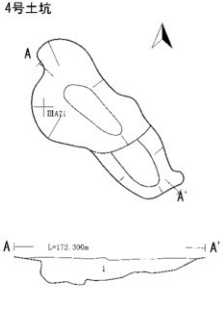
2号土坑
1　10YR2/3　暗褐色土　粘性有。締り弱。
　火山礫混む。
1　10YR3/2　黒褐色土　粘性有。締り弱。

3号土坑



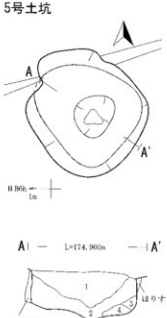
3号土坑
1　10YR2/4　黒色土　小礫少量含む。
　粘性やや有。締っている。

4号土坑



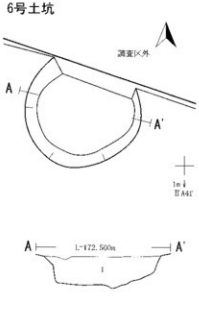
4号土坑
1　10YR3/1　黒褐色土　小礫少量含む。粘性やや有。
　締っている。

5号土坑

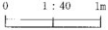


5号土坑
1　10YR2/2　黒褐色土　小石を少量含む。
　粘性、締りやや有。
2　10YR3/3　暗褐色土　黒褐色土や黄褐色土
　が交互に堆積。粘性、締りやや有。
3　10YR5/8　黄褐色土　粘性やや有。締って
　いる。
4　10YR3/3　暗褐色土　黒褐色土や黄褐色土
　が交互に堆積。粘性、締りやや有。

6号土坑

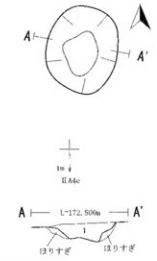


6号土坑
1　10YR2/3　黒褐色土　炭粒・焼土粒を少量含む。
　土器片も1袋掘出す。粘性、締りやや有。
　（人為堆積）
　物を捨てた穴か。



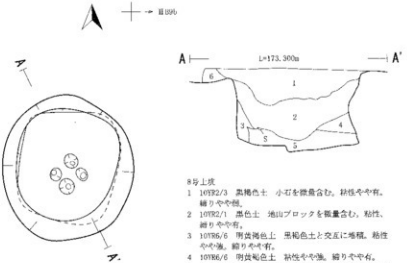
第17図　土坑1

7号土坑



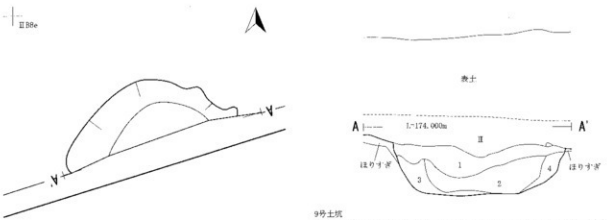
7号土坑
1　10YR3/3　暗褐色土　小礫・地山ブロックを少量含む。粘性、締りやや弱。

8号土坑



8号土坑
1　10YR2/3　黒褐色土　小石を微量含む。粘性やや有。締りやや弱。
2　10YR2/1　黒色土　地山ブロックを微量含む。粘性、締りやや有。
3　10YR5/6　明黄褐色土　黒褐色土と交互に堆積。粘性やや強。締りやや有。
4　10YR6/6　明黄褐色土　粘性やや強。締りやや有。
5　10YR2/3　黒褐色土　地山ブロック多量に含む。粘性、締りやや有。
6　10YR3/2　黒褐色土　粘性、締りやや有。
自然堆積

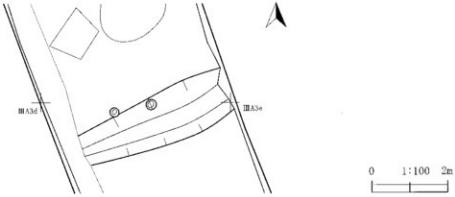
9号土坑



9号土坑
1　10YR2/2　黒褐色土　10YR3/2　黒褐色土ブロック少量含む。粘性、締りやや有。
2　10YR3/2　黒褐色土　地山ブロック少量含む。粘性、締りやや有。
3　10YR3/2　黒褐色土　明黄褐色土と交互に堆積。粘性やや強。締りやや有。
4　10YR3/2　黒褐色土　地山ブロック多量に含む。粘性やや強。締りやや有。
自然堆積。9号土坑は住居より新しい。

0　1：40　1m

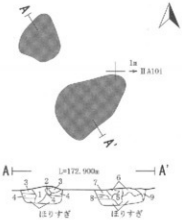
1号溝



0　1：100　2m

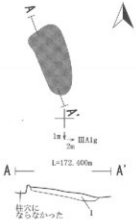
第18図　土坑２、溝跡

1号焼土



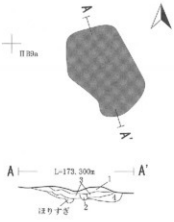
1号焼土
1 10YR3/2 黒褐色土 粘性やや有。締り弱。
2 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒を微量含む。粘性、締りやや有。
3 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性弱。締りやや有。
4 5YR7/4 にぶい橙色土 粘性やや有。締っている。(粒てた焼土ではない)
5 10YR2/1 黒色土 焼土粒微量含む。粘性やや有。締り弱。炉焼痕。
6 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性弱。締りやや有。
7 10YR4/4 褐色土 焼土・黒色土ブロック多量に含む。粘性、締りやや有。
8 10YR2/2 黒褐色土 粘性、締りやや有。
9 10YR2/2 黒褐色土 粘性、締りやや有。

3号焼土



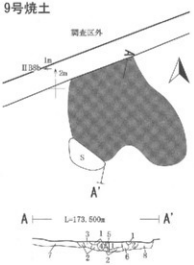
3号焼土
1 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 所々に草根痕見られる。粘性弱。締りやや有。(粒てた焼土ではない)

6号焼土



6号焼土
1 7.5YR3/1 黒褐色土 焼土ブロックを多量に含む。粘性やや有。締り弱。
2 10YR7/6 明黄褐色土 粘性やや有。締り弱。草根痕。
3 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性弱。締っている。(焼成良好)
4 10YR3/2 黒褐色土 粘性、締りやや有。

9号焼土

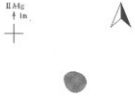


9号焼土
1 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性弱。締っている。よく焼けている。
2 10YR6/6 明黄褐色土 1層に近い部分は2.5YR6/6 橙色に変わっている。粘性、締りやや有。
3 10YR5/8 黄褐色土 粘性、締り弱。
4 10YR4/6 褐色土 焼土ブロック少量含む。粘性、締り弱。
5 7.5YR5/6 明褐色土 焼土ブロック少量含む。粘性、締り弱。
6 10YR4/6 褐色土 粘性、締りやや有。
7 10YR3/4 暗褐色土 粘性、締りやや有。
8 10YR3/2 黒褐色土 粘性、締りやや有。
※4～6層は草根痕。
8層となりに大きな石があるが全く焼けていない。

11号焼土

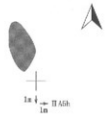
11号焼土
1 10YR4/8 赤褐色焼土 粘性、締りやや有。
2 10YR2/3 黒褐色土 粘性、締りやや有。
※風倒木にやられている。

12号焼土



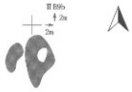
12号焼土→断面観察なし
1 2.5YR4/8 赤褐色焼土ブロックからなる。(明黄褐色土・黒褐色土が混じる)
※直径20cm弱 厚さ3cm以下であろう。

13号焼土



13号焼土→断面観察なし
1 10YR2/2 黒褐色土 赤褐色焼土ブロック少量含む。上層片も含む。
※12号・13号焼土はともにデコボコした地形のところにある。これは金銅のせいか?

14号焼土

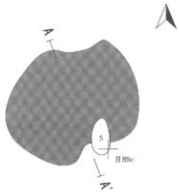


14号焼土→断面観察なし
1 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 直径10cmに満たない範囲。その周りにも焼土粒が不規則に広がりを持つ。
※炉になるか不明。

0 1:40 1m

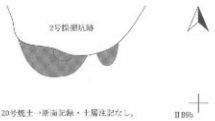
第19図 焼土1

19号焼土



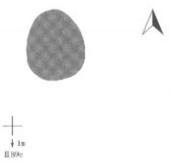
19号焼土
1　10YR2/2　黒褐色土　焼土ブロック少量含む。粘性、締りやや有。
2　2.5YR5/8　明赤褐色焼土　粘性やや弱。締りやや有。
3　10YR2/2　黒褐色土　粘性、締りやや有。
4　10YR3/3　暗褐色土　粘性やや有。締りやや弱。

20号焼土



20号焼土　→断面正面・土層注記なし。

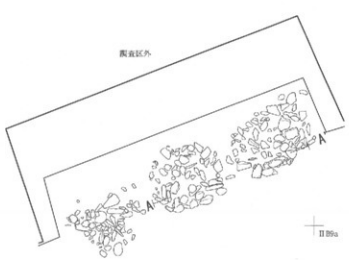
21号焼土



21号焼土　→断面正面・土層注記なし。

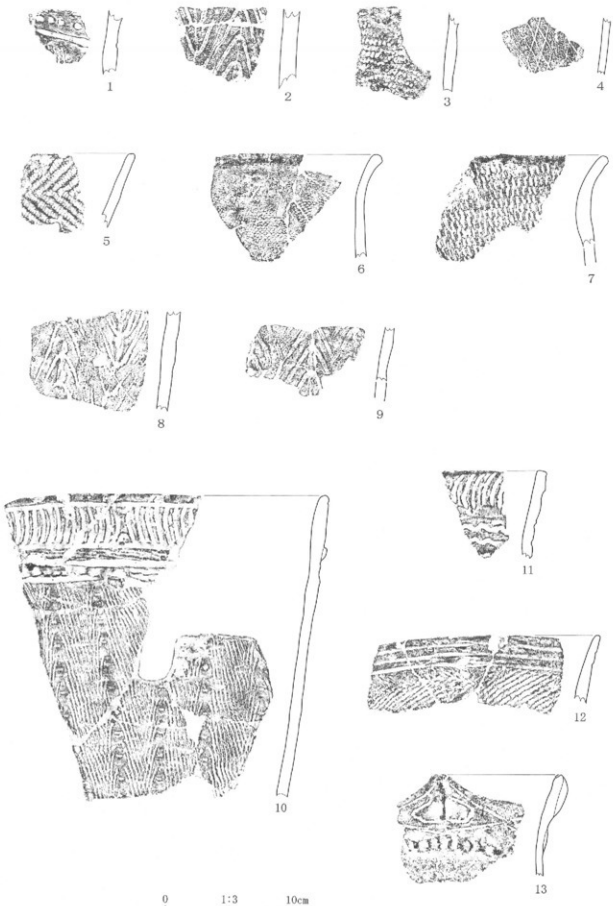
0　1：40　1m

1号集石

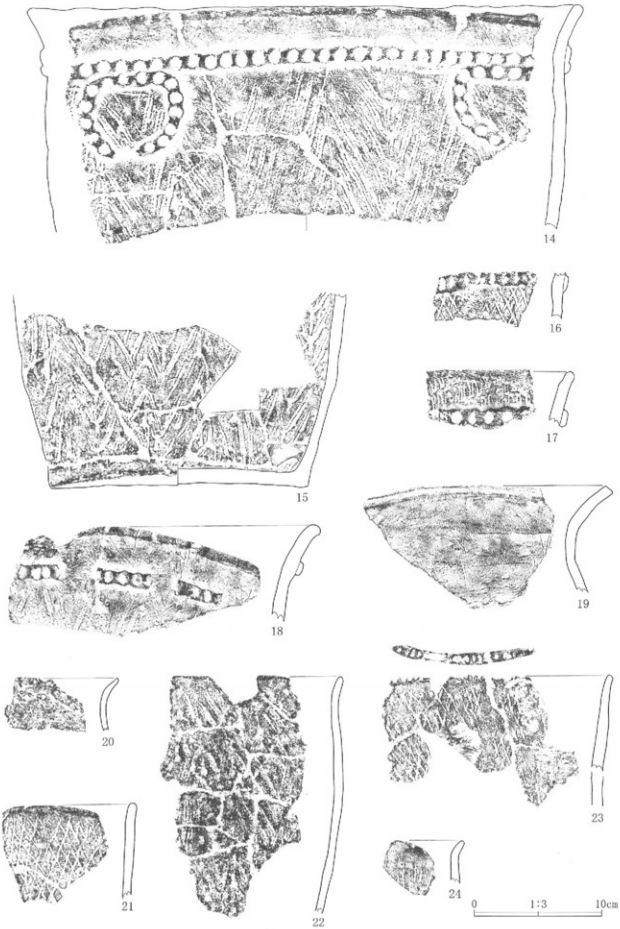


0　1：40　1m

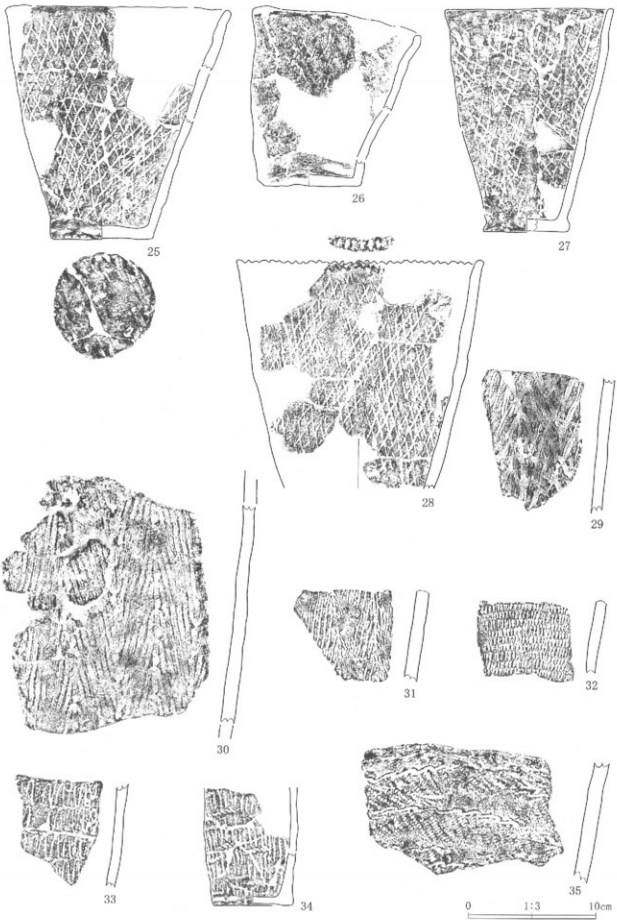
第20図　焼土２、集石



第21図　土器1



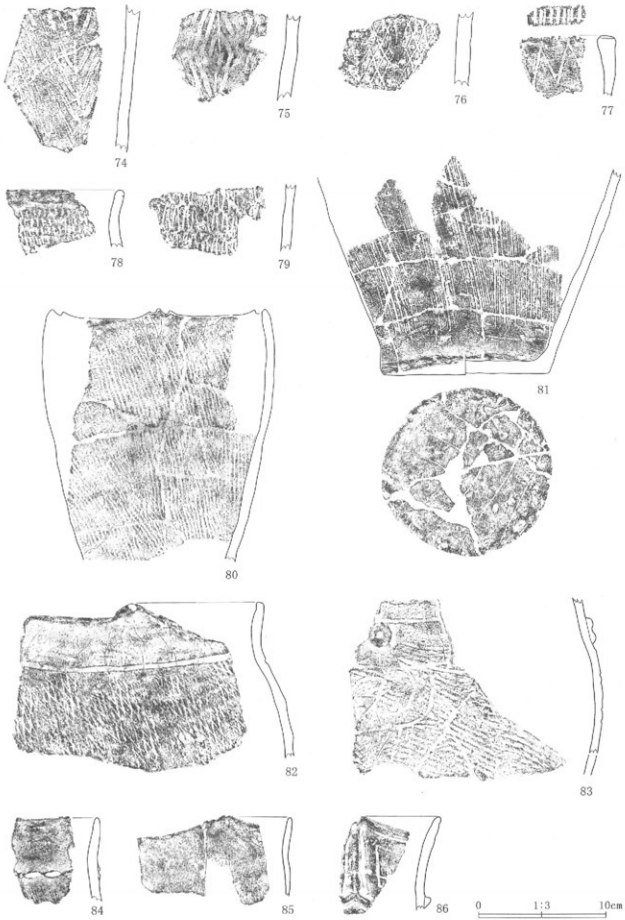
第22図　土器２



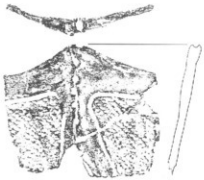
第23図　土器3

第24図　土器４

第25図　土器5



第26図　土器6


87

88

89

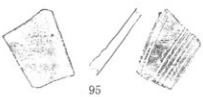
90

91

92

93

94


95

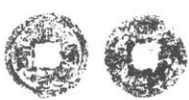
0　1:3　10cm

96

97

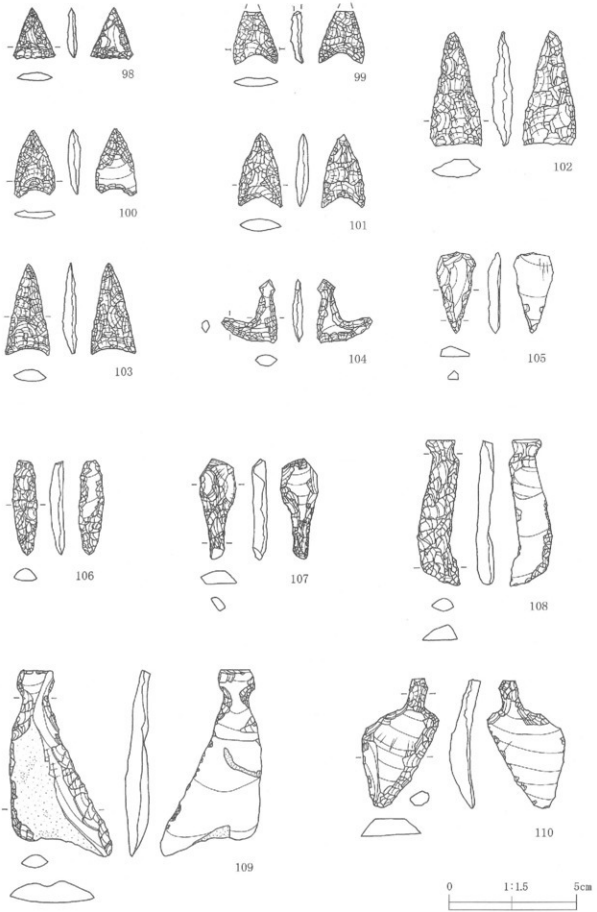
0　1:2　5cm

170

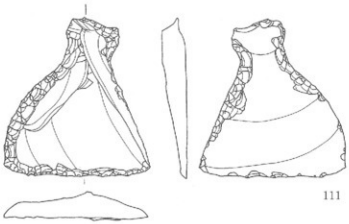

171

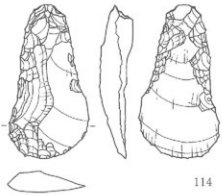
0　1:1　5cm

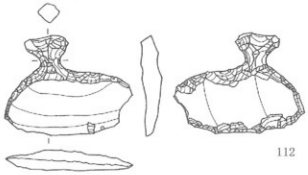
第27図　土器７ほか

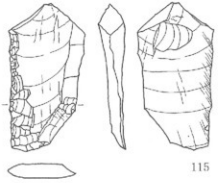


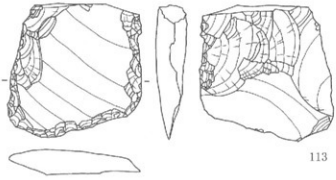
第28図　石器１

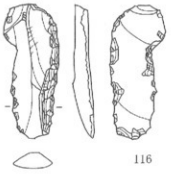

111


114


112


115


113

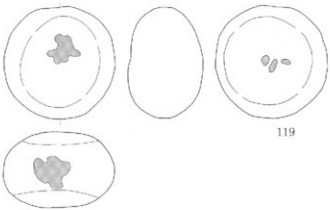

116

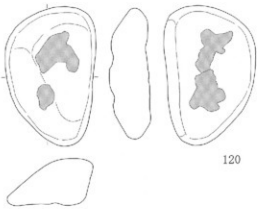
117

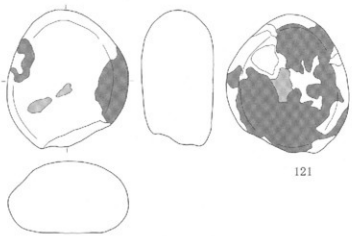
118

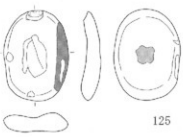
0　1:1.5　5cm

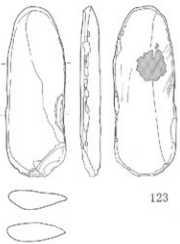
第29図　石器2

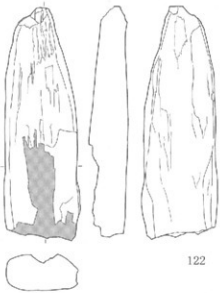

119

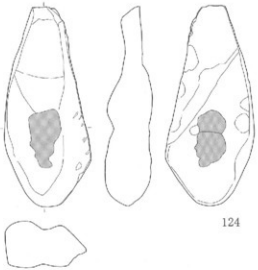

120


121


125

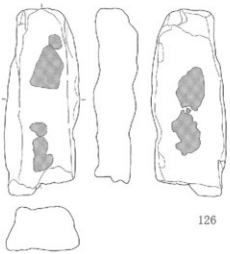

123

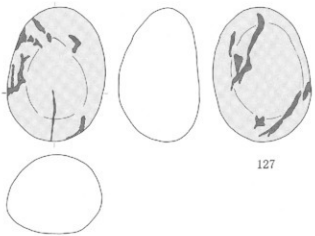

122

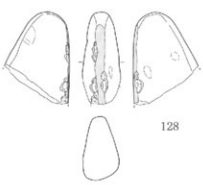

124

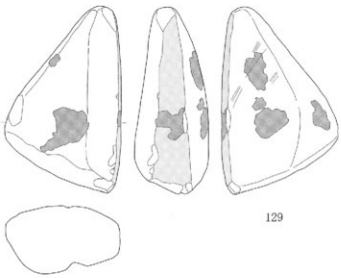
0　1:3　10cm

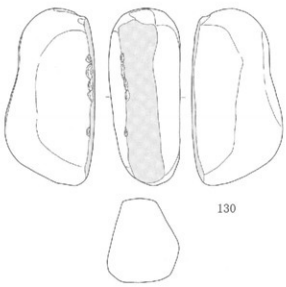
第30図　石器３

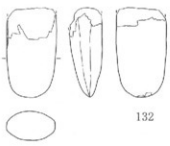


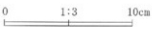




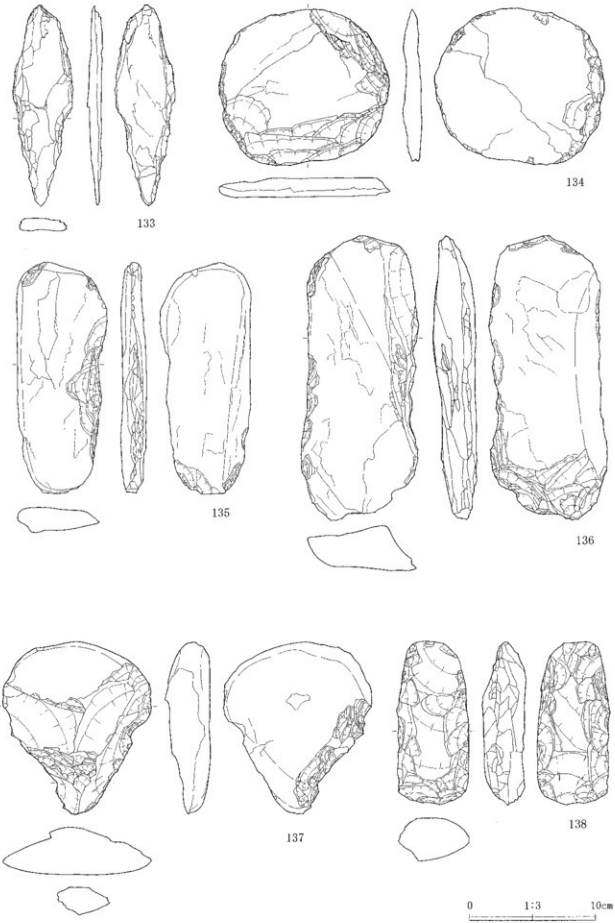




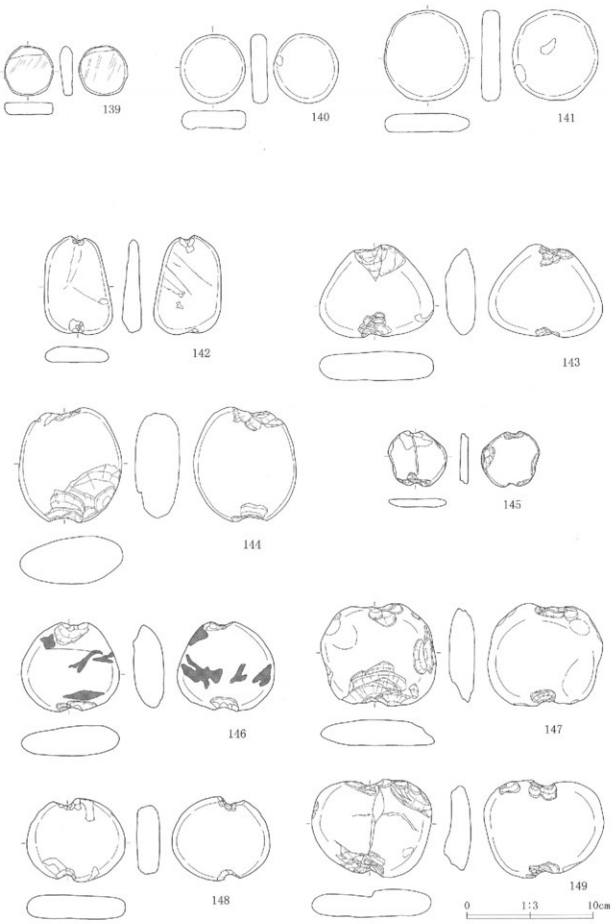




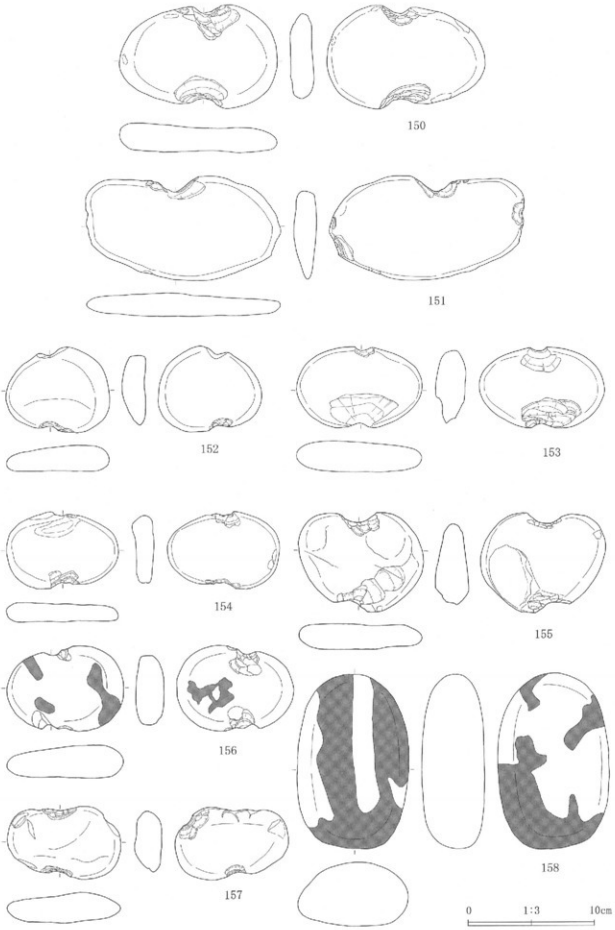
第31図　石器4



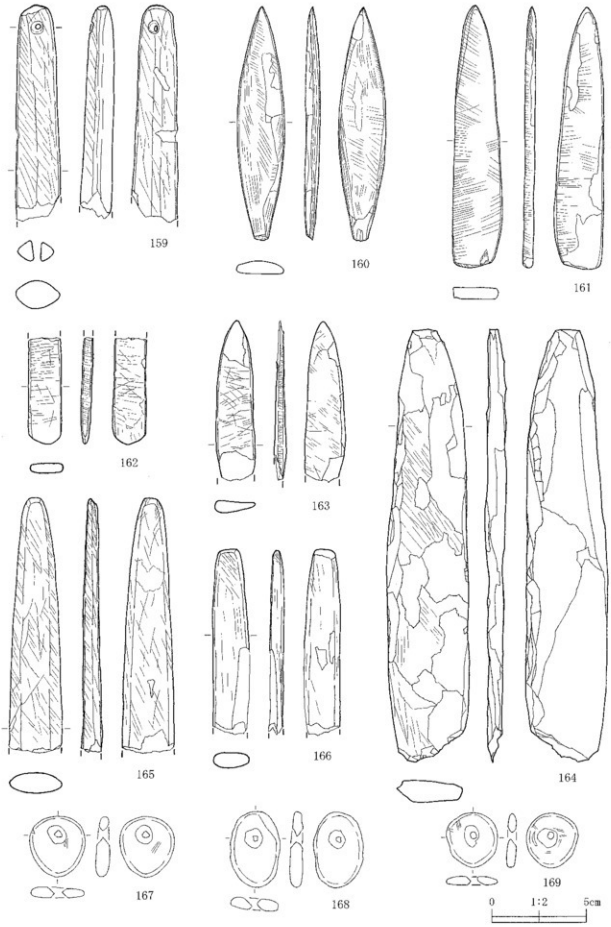
第32図　石器５



第33図　石器6



第34図　石器７



第35図　石器8

第３表　土器・土製品観察表

掲載番号	調査区	遺構名・出土地点	層位など	種別	部位	文様の特徴	分類
1	中央	02号住居　南西区	埋土	深鉢	胴部	刺突列と沈線	ⅠB
2	中央	02号住居　Aベルト	埋土	深鉢	胴部	木目状撚糸文L	ⅠB4
3	中央	03号住居	検出中	鉢類	口縁	LR	Ⅰ
4	中央	03号住居　Aベルト	埋土	深鉢	胴部	網目状撚糸文R か	ⅠB4
5	中央	05号住居	埋土	深鉢	口～胴	羽状縄文単節、結束、胎土に繊維	ⅠA1
6	中央	05号住居	埋土（10号焼土周辺）	深鉢	口～胴	縄文の原体ではないようだ	Ⅰ
7	中央	05号住居	表皮剥土（10号焼土のブロック）	深鉢	口～胴	口唇部丸みあり、撚糸圧痕文L	Ⅰ
8	中央	05号住居	埋土	深鉢	胴部	木目状撚糸文L	ⅠB4
9	中央	10号焼土（05号住居）	焼土層	深鉢	胴部	木目状撚糸文L。胎土に砂多	ⅠB4
10	北③	北側不整形プラン	ベルトより北埋土	深鉢	口～胴	弧線文を沈線で区画、頸部に隆帯と刺突文 木目状撚糸文R	ⅠB1b
	北③	北側不整形プラン	ベルトより北埋土				
11	北③	北側不整形プラン	ベルトより北埋土	深鉢	口縁	口縁部には弧状沈線、その下には鰭脊状沈線	ⅠB1b
12	北③	北側不整形プラン	ベルトより北埋土		口縁	沈線、L	ⅠB3
13	北③	北側不整形プラン	ベルトより北埋土	深鉢	口～胴	山形口縁、隆帯と沈線による区画文 頸部の隆帯には指頭圧痕文	ⅠB1b
14	北③	06号住居	上器08	深鉢	口～胴	網目状撚糸文R か	ⅠB1a
15	北③	06号住居	土器09	深鉢	底部	木目状撚糸文L＋L、胎土に砂多	ⅠB
	北③	北側不整形プラン	ベルトより北埋土				
16	北③	北側不整形プラン	ベルトより北埋土	深鉢	頸部	隆帯に指頭圧痕列、網目状撚糸文R	ⅠB1b
17	北③	北側不整形プラン	埋土	深鉢	口縁	撚糸文L、隆帯に指頭圧痕文列	ⅠB1b
18	北③	北側不整形プラン	ベルトより南埋土	深鉢	口縁	隆帯に指頭圧痕列、木目状撚糸文L で中央を結ぶ	ⅠB1b
19	北③	北半大形プラン	東側トレンチ	深鉢	口縁	口縁部外反、口唇部角張っている	ⅠB
20	北③	北側不整形プラン	埋土	深鉢	口縁	口縁の一部を捉じっている。胎土に小石多い	ⅠB
21	北③	06号住居	土器14	鉢類	口～胴	網目状撚糸文、胎土に小石や雲母含む	ⅠB4
22	北③	06号住居	上器10	深鉢	口～胴	木目状撚糸文か、かなり風化している	ⅠB4
23	北③	06号住居	土器24	深鉢	口～胴	口唇部は刻目文、胴部は網目状撚糸文	ⅠB4
	北③	北側不整形プラン	埋土				
24	北③	06号住居	埋土	鉢類	口～胴	撚糸文L	ⅠB4
25	北③	06号住居	土器13	鉢類	口～底	網目状撚糸文 r か	ⅠB4
	北③	06号住居	上器15				
	北③	06号住居	土器24				
	北③	北側不整形プラン	ベルトより北埋土				
26	北③	北側不整形プラン	ベルトより北埋土	鉢類	口～底	殆ど無文、一部に不整撚糸文、かなり歪んでいる	ⅠB4
27	北③	06号住居	土器01				ⅠB4
	北③	北側不整形プラン	ベルトより南埋土				
28	北③	06号住居	土器24	深鉢	口～胴	口縁部：刻目 胴部：網目状撚糸文 r	ⅠB4
29	北③	06号住居	土器12	深鉢	胴部	木目状撚糸文R で中央を結ぶ。胎土に小石多	ⅠB4
30	北③	06号住居	土器05	深鉢	胴部	木目状撚糸文R＋L	ⅠB4
31	北③	北半大形プラン	東端トレンチ	深鉢		木目状撚糸文L	ⅠB4

掲載番号	調査区	遺構名・出土地点	層位など	種別	部位	文様の特徴	分類
32	北③	北側 不整形プラン	ベルトより北 埋土	深鉢	胴部	撚糸圧痕	ⅠB5
33	北③	06号住居	ブロックE 石09下	深鉢	胴部	網目状撚糸文の変種L	ⅠB4
34	北③	06号住居ベルト	埋土		胴－底	撚糸文を軸と同じ方向に縛る	ⅠB4
	北③	06号住居	土器11				
	北③	北側 不整形プラン	ベルトより北 埋土				
35	北③	06号住居	土器02	深鉢	胴部	RL結節	ⅠB5
36	中央	05号土坑	南半　埋土	深鉢	胴部	単節羽状縄文か、かなり風化している	ⅠA
37	北④	06号土坑	南半　埋土	深鉢	口縁	口縁部は無文、地文RL	Ⅱ
38	北④	06号土坑	南半　埋土	鉢類	口縁	沈線で区画された内側にLRか	Ⅱ
39	北④	06号土坑	南半　埋土	深鉢	口－胴	口縁：無文、頸部：刺突文、胴部：RL	Ⅱ
40	中央	01号焼土	西半　埋土	深鉢	口－胴	口縁：沈線や刺突を施した隆帯（横位、鋸歯、C字） 胴部：網目状撚糸文の変種L	ⅠB1b
41	中央	07号焼土	埋土	深鉢	胴部	網目状撚糸文の変種0段か	ⅠB4
42	中央	08号焼土	南半　埋土	深鉢	口－胴	指頭圧痕のある隆帯でC字基調の文様、網目状撚糸文の変種L	ⅠB1a
43	中央	11号焼土	北西区直上	深鉢	底部	無節Rか、表目かなり風化している	Ⅰか
	中央	土器出土プラン	埋土				
44	北④	13号焼土	埋土	深鉢	口－胴	口縁部に刻目列、胴部：沈線文、RL。胎土に小石多	Ⅲ
45	中央	19号焼土及び周辺		深鉢	胴部	非結束の単節羽状縄文、繊維	ⅠA1
46	南	東端	表土	深鉢	胴部	無節の羽状縄文か、胎土に繊維多	ⅠA1
47	中央	110東	Ⅱ層	深鉢	胴部	羽状縄文単節	ⅠA1
48	中央	110中央	Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	胴部	単節羽状縄文、非結束か、胎土に繊維多	ⅠA1
49	中央	110	Ⅱ層	鉢類	口縁	縦方向に浅い波状の沈線	ⅠAか
50	中央	110西	Ⅲ層	鉢類	口縁	口唇部に刻目、口縁に不整撚糸文	ⅠA2
51	中央	111東半	表土	深鉢	口縁	口縁：隆帯に指頭圧痕、網目状撚糸L	ⅠB1b
52	北①		検出面	深鉢	口－胴	口縁の隆帯に指頭圧痕、胴部：木目状撚糸文L	ⅠB1b
53	南	北東	Ⅰ～Ⅱ層	深鉢	口縁	口縁：隆帯に指頭圧痕、撚糸文L	ⅠB1b
54	中央	土器出土プラン	南西区　埋土	深鉢	口縁	口唇：指頭圧痕 口縁：隆帯に指頭圧痕	ⅠB1b
55	中央	109ベルトの東	Ⅱ層下位～Ⅲ層	深鉢	口－胴	口縁：円形を基調とする隆帯に指頭圧痕、木目状撚糸文L＋R	ⅠB1a
	中央	109～110	Ⅱ層その①				
56	中央	西端	表土	深鉢	胴部	指頭圧痕のある隆帯で円形基調の文様、木目状撚糸文L＋R	ⅠB1a
57	中央	109西端	Ⅱ～Ⅲ層上面	深鉢	口縁	木目状撚糸文L、２列の隆帯には指頭圧痕あり	ⅠB1a
	中央	109～110	Ⅱ層その①				
58	南	T27の近く	Ⅰ～Ⅱ層	深鉢	口縁	口唇平坦、口縁部に指頭圧痕、RLか	ⅠB1b
59	中央	109西	Ⅱ層下位	深鉢	口縁	沈線を横に引き、その上から爪で刻目、不整撚糸文	ⅠB1b
60	中央	110西	表土	鉢類	口縁	刻目のある隆帯２、沈線による円文、LR	ⅠB1a
61	南	水田面	南東　表土	深鉢	口縁	隆帯＋沈線、撚糸文L	ⅠB1b
62	中央	110東	Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	口縁	口唇部に鋸歯状の貼付、LR	ⅠB2
63	南	東端	表土	鉢類	胴部	鋸歯状の貼付、天地左右自信ない	ⅠB2
64	中央	110中央	Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	胴部	刺突列、浅い沈線、網目状撚糸文	ⅠB3
65	中央	110中央	Ⅱ層下位～Ⅲ層	深鉢	口－胴	口縁下に２本の沈線、胴：単節羽状縄文	ⅠB3
66	中央	110東	Ⅱ層	鉢類	口－胴	撚糸文L＋R	ⅠB4
67	中央	111東半	表土	深鉢	胴部	木目状撚糸文L＋R	ⅠB4
68	南	T27の近く	Ⅰ～Ⅳ層	深鉢	胴部	木目状撚糸文L。胎土に砂多	ⅠB4
69	南	T27の近く	Ⅰ～Ⅱ層	深鉢	口－胴	木目状撚糸文R	ⅠB4
70	北①		検出面	深鉢	胴部	木目状撚糸文R	ⅠB4
71	中央	02号採掘坑の南 不整形プラン	埋土	深鉢	口－胴	ゆるい木目状撚糸文rか	ⅠB4
72	中央	110東	Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	胴部	木目状撚糸文R＋L	ⅠB4
	中央	110中央	Ⅱ層				

掲載番号	調査区	遺構名・出土地点	層位など	種別	部位	文　様　の　特　徴	分類
73	南	中央　東端	表土～黒褐色土層	深鉢	胴部	木目状撚糸文L。胎土に砂多	ⅠB4
74	南	111中央	Ⅰ層（耕作土）～黒褐色土層	深鉢	胴部	木目状撚糸文L、胎土に砂多	ⅠB4
75	南	東端	表土	深鉢	胴部	木目状撚糸文L＋Rで菱形の模様に	ⅠB4
76	中央	110中央	Ⅱ層	深鉢	胴部	網目状撚糸文L	ⅠB4
77	中央	109～110	Ⅱ層その①	鉢類	口縁	平坦にした口縁に刻目、沈線による鋸歯状文	ⅠB5
78	中央	110中央	Ⅱ層	鉢類	口縁	撚糸文圧痕文L	ⅠB4
79	中央	109西端	Ⅱ～Ⅲ層上面	深鉢	胴部	網目状撚糸文の変種L	ⅠB4
80	中央	土器出土ブラン	検出中	深鉢	口縁	刻目のある口縁突起、撚糸文は0段か	ⅠB5
	中央	土器出土ブラン	南西区　埋土				
	中央	土器出土ブラン	埋土				
81	中央	土器出土ブラン	検出中	深鉢	胴～底	櫛描文	ⅠB5
	中央	土器出土ブラン	南西区埋土				
	中央	土器出土ブラン	南東区埋土				
82	中央	土器出土ブラン	埋土	深鉢	ロ～胴	小突起、頸部：沈線、胴部：網目状撚糸文	Ⅱ
83	中央	03号住居の南西	Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	胴部	沈線による曲線的な文様、粘土貼付、1段L	Ⅱ
84	北④	不整形ブラン	黒褐色土層～暗褐色土層（2回目）	深鉢	ロ～胴	連鎖沈線、撚糸文は0段か	Ⅲ
85	中央	土器出土ブラン	南西区　埋土	鉢類	ロ～胴	波形口縁、地紋なし	Ⅱか Ⅲ
	中央	土器出土ブラン	埋土				
86	北④	不整形黒褐色土ブラン	埋土	深鉢	口縁	山形口縁、隆帯と沈線による区画文	Ⅲ
87	中央	02号採掘坑の南 不整形ブラン	埋土	深鉢	ロ～胴	縦に刺突列は口唇部までであり、沈線による区画、LR	Ⅲ
88	中央	土器出土ブラン	南西区　埋土	鉢類	口縁	刻目のある山形口縁、沈線文	Ⅲ
89	北④	不整形ブラン	黒褐色土層～暗褐色土層（2回目）	鉢類	ロ～胴	刻目のある山形口縁、隆帯にも刻目、沈線文、撚糸文R	Ⅲ
90	西	1号溝	埋土	深鉢	胴部	沈線による区画文と連続S字状文、RL	Ⅲ
91	北④	不整形ブラン	北トレンチ（切断壷の置後層）	鉢類	口縁	切り離して壷とする。紐を通す部分あり、沈線文、朱が少しついている	Ⅲ
92	北④	不整形ブラン	黒褐色土層～暗褐色土層（2回目）	小型	ロ～胴	無文、口縁に孔あり	
94	中央	109～110	Ⅱ層その①	鉢類	底部	撚糸文	
95	中央	110中央	表土	擂鉢	胴部	中近世の擂鉢	

掲載番号	調査区	遺構名・出土地点	層位など	重量（g）	特　　徴	分類
93	中央		土器1	38.41	無文のミニチュア土器	その他
96	中央	07号焼土　拡張	埋土	17.72	耳飾り、刺突文巡る	その他
97	北④	不整形黒褐色土	埋土	9.20	土製円盤	その他

第４表　石器・石製品観察表

番号	分類	調査区	出土地点・層位など	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石材	産地ほか	
98	A Ⅰa2	中央	05号住居跡埋土 (10号焼土周辺)	0.81	2.0	1.7	0.35	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀
99	A Ⅰa2	中央	05号住居跡南西　埋土	1.14	2.1	1.8	0.4	凝灰岩	奥羽山脈	新生代新第三紀
100	A Ⅰa2	中央	111田区　東	1.52	2.55	1.6	0.5			
101	A Ⅰa2	南	中央　竪穴　検出面	1.92	2.9	1.7	0.45			
102	A Ⅰa2	中央	109田区西端 Ⅲ～Ⅲ層上面	5.16	4.5	2.0	0.7	頁岩	北上山地	古生代後期
103	A Ⅰa2	中央	109田区　西端 Ⅱ～Ⅲ層上面	2.22	3.6	1.7	0.5			
104	針	中央	03号住居跡の南西 Ⅱ～Ⅲ層	1.28	2.5	2.2	0.4	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀
105	A Ⅱ	中央	04号焼土周辺	2.01	3.2	1.6	0.4	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀
106	A Ⅱ	中央	110田区　Ⅰ層	2.08	3.7	1.0	0.5	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀
107	A Ⅱ	中央	110田区　東　Ⅱ～Ⅲ層	3.30	4.0	1.5	0.6			
108	A Ⅲa	中央	Ⅱ層	5.50	5.7	1.7	0.6	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀
109	A Ⅲa	北③	北側不整形プラン(6号住) 埋土	17.86	7.3	4.0	1.0			
110	A Ⅲa		110田区のとなり　Ⅱ層	9.01	5.1	3.0	0.8			
111	A Ⅲb		14号焼土周辺　Ⅱ～Ⅲ層	23.39	6.3	5.7	1.0	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀
112	A Ⅲb	北③	北側不整形プラン　埋土	9.94	4.0	5.0	0.8	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀
113	A Ⅳ2	中央	西端　表土	34.55	5.2	5.2	1.0			
114	A Ⅳ3	北③	北側不整形プラン　埋土	1.34	5.8	3.1	1.2	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀
115	A Ⅴc	中央	08号土坑　埋土上位	11.74	7.85	3.0	1.0	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀
116	A Ⅴc	北③	不整形プラン　埋土	7.16	5.3	2.1	0.8	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀
117	A Ⅴc	中央	03号住居跡周辺　Ⅱ層	1.85	2.0	1.5	0.7	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀
118	B Ⅻa	北④	不整形プラン 黒褐色上～暗褐色土	2.82	3.9	1.2	0.4			
119	B Ⅵa1	北③	06号住居跡	704.02	8.7	8.6	5.9	斑糲岩	北上山地	中生代白亜紀
120	B Ⅵa1	北④	06号土坑　埋土	350.97	10.9	7.1	3.7	砂岩	北上山地	古生代後期
121	B Ⅵa1	北③	北側不整形プラン　埋土	744.00	10.8	9.4	5.7	蛇紋岩	北上山地	古生代 オルドビス紀
122	B Ⅵa3	中央	05号土坑北半　埋土	459.70	18.4	6.0	3.1	頁岩	北上山地	古生代後期
123	B Ⅵa3	中央	02号住居跡　埋土	148.60	13.5	4.7	1.65	ホルン フェルス	北上山地	古生代の頁岩が 中生代白亜紀に 熱変成
124	B Ⅵa3		08号土坑	443.12	15.7	6.8	3.6	砂岩	北上山地	古生代後期
125	B Ⅵa4	北①	北不整形プラン　埋土	75.02	7.1	5.1	1.1	頁岩	北上山地	古生代後期
126	B Ⅵa3	中央	03号住居跡　埋土	425.74	14.6	5.9	3.5	砂岩	北上山地	古生代後期
127	B Ⅶa	中央	03号住居跡　埋土	689.03	10.4	7.5	6.3	蛇紋岩	北上山地	古生代オルドビス紀
128	B Ⅶb1	中央	109田区　西端 05号住居跡　埋土	115.83	7.2	5.1	3.0	花崗 閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀
129	B Ⅵ、Ⅶ	北③	06号住居跡	780.70	14.8	9.1	5.4	花崗 閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀
130	B Ⅵ、Ⅶ	北③	06号住居跡	908.64	14.0	7.0	5.7	花崗 閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀
131	B Ⅶa	中央	03号採掘坑周辺　Ⅱ層	27.26	5.2	2.7	1.2	頁岩	北上山地	古生代後期
132	B Ⅶa	北④	検出時	108.81	(7.0)	3.9	2.6			
133	B Ⅹ Ⅲ	中央	03号住居跡 遺構内～周辺	74.52	15.3	4.25	1.1	頁岩	北上山地	古生代後期
134	D	中央	Ⅱ～Ⅲ層	293.55	11.9	13.4	1.45	頁岩	北上山地	古生代後期
135	B Ⅹ Ⅲ	中央	3号住居跡　遺構内～周辺	336.00	18.1	7.1	2.0	頁岩	北上山地	古生代後期
136	Ⅹ Ⅲ	北③	06号住居跡	872.68	22.3	8.2	3.45	頁岩	北上山地	古生代後期
137	B Ⅹ Ⅲ	南	T27付近　Ⅰ～Ⅱ層	569.70	13.5	11.9	3.6	頁岩	北上山地	古生代後期
138	B Ⅹ Ⅲ	中央	05号住居跡　埋土	315.32	12.75	5.7	3.35	ホルン フェルス	北上山地	古生代の頁岩が 中生代白亜紀に 熱変成
139	D Ⅹ Ⅷ	中央	109田区　西　Ⅱ～Ⅲ層	19.39	3.9	3.8	1.0	凝灰岩	奥羽山脈	新生代新第三紀
140	D Ⅹ Ⅷ	南	東端　表土	56.64	5.5	5.15	1.4	砂岩	北上山地	古生代後期
141	D Ⅹ Ⅷ	北③	北側不整形プラン　埋土	105.36	6.8	6.75	1.5	凝灰岩	奥羽山脈	新生代新第三紀
142	B Ⅹ Ⅴ	北③	北側不整形プラン　埋土	81.75	7.8	5.3	0.95	砂岩	北上山地	古生代後期

番号	分類	調査区	出土地点・層位など	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石材	産地ほか
143	BXV 石錘	中央	02号住居跡　埋土	267.93	6.7	9.1	2.2	砂岩	北上山地 古生代後期
144	BXV	南	T27付近　Ⅰ～Ⅱ層	363.92	9.1	8.1	3.5	蛇紋岩	北上山地 古生代 オルドビス紀
145	BXV	中央	掘上	20.28	4.4	4.6	0.7	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀
146	BXV	北③	検出面	168.50	7.1	7.8	2.3	蛇紋岩	北上山地 古生代 オルドビス紀
147	BXV		北不整形ブラン	226.74	7.4	8.9	2.0	頁岩	北上山地 古生代後期
148	BXV	南	東端　表土	136.67	6.65	7.75	1.3	蛇紋岩	北上山地 古生代 オルドビス紀
149	BXV	中央	P196　埋土	208.50	6.7	9.4	1.5	頁岩	北上山地 古生代後期
150	BXV	北③	検出面	304.50	6.3	12.5	1.8	頁岩	北上山地 古生代後期
151	その他	北④	黒色不整形ブラン？	306.75	8.2	15.5	1.8	頁岩	北上山地 古生代後期
152	BXV	北①	北不整形ブラン　埋土	130.14	5.5	8.1	1.8	砂岩	北上山地 古生代後期
153	BXV	中央	110田区　東	200.58	6.4	9.9	2.4	頁岩	北上山地 古生代後期
154	BXV	中央	110田区　1層	126.22	6.0	8.8	1.6	砂岩	北上山地 古生代後期
155	BXV	南	北東　Ⅰ、Ⅱ層	249.57	7.9	9.9	2.7	ホルンフェルス	北上山地 古生代の頁岩が中生代白亜紀に熱変成
156	BXV	北③	北側不整形ブラン　埋土	198.38	5.5	9.2	2.2	蛇紋岩	北上山地 古生代 オルドビス紀
157	BXV	北③	06号住居跡　埋土	162.72	4.7	9.0	2.2	砂岩	北上山地 古生代後期
158	その他	中央	110田区中央(02号住居跡周辺)　Ⅱ層下位～Ⅲ層	730.82	1.35	8.8	5.0	蛇紋岩	北上山地 古生代 オルドビス紀
159	DXVII	南	T27付近　Ⅰ～Ⅱ層	58.90	11.3	2.3	1.6	頁岩	北上山地 古生代後期
160	DXIX	北③	北側不整形ブラン	30.54	12.2	2.5	0.8	頁岩	北上山地 古生代後期
161	BXIIb3	中央	05号住居跡　埋土(10号焼土)	39.73	13.6	2.6	0.6	頁岩	北上山地 古生代後期
162	BXIIb3	中央	05号住居跡　埋土(10号焼土)	9.92	(5.1)	1.25	0.55	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀
163	D	中央	109田区　西端　Ⅱ～Ⅲ層上面	12.77	8.3	2.1	0.65	頁岩	北上山地 古生代後期
164	DXVII	中央	05号住居跡　南西部埋土	171.53	22.7	4.3	1.15	頁岩	北上山地 古生代後期
165	DXVII	北③	北側不整形ブラン　埋土	56.06	13.4	2.7	1.0	頁岩	北上山地 古生代後期
166	DXVII	北③	06号住居跡	23.17	(9.75)	1.85	0.75	頁岩	北上山地 古生代後期
167	有孔石製品	北③	06号住居跡　南側埋土	7.84	2.8	2.7	0.5		未製品
168	有孔石製品	北③	06号住居跡　南側埋土	8.32	4.0	2.6	0.7		未製品
169	有孔石製品	北③	06号住居跡　南側埋土	5.32	3.2	2.9	0.7		未製品
187	AII	南	P035　埋土	3.04	—	—	—	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀
188	AIIIa	中央	110田区のとなり　Ⅱ層	4.08	—	—	—	頁岩	北上山地 古生代後期
189	AVc	中央	03号掘組坑周辺　Ⅲ層検出中	47.70	—	—	—	頁岩	北上山地 古生代後期
190	AVc		不整形ブラン　埋土	11.09	—	—	—	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀
191	BVIa1	北③	06号住居跡	889.75	—	—	—	蛇紋岩	北上山地 古生代 オルドビス紀
192	BVIa1	北③	北側不整形ブラン　埋土	189.71	—	—	—	デーサイト	北上山地 中生代白亜紀
193	BVIa1	北③	北半大型ブラン　黒褐色土	192.46	—	—	—	蛇紋岩	北上山地 古生代 オルドビス紀
194	BVIa3	北③	06号住居跡	511.77	—	—	—	頁岩	北上山地 古生代後期
195	BXIII	中央	03号住居跡　埋土	258.22	—	—	—	頁岩	北上山地 古生代後期
196	BXIII	中央	110田区　西　Ⅱ～Ⅲ層上位	1094.06	—	—	—	砂岩	北上山地 古生代後期
197	BXIII	南	北側水田面　西　検出面	375.37	—	—	—	ホルンフェルス	北上山地 古生代の頁岩が中生代白亜紀に熱変成
198	BXIII	中央	03号住居跡　埋土	878.50	—	—	—	チャート	北上山地 古生代後期
199	DXVII	中央	03号住居跡　埋土	53.32	—	—	—	凝灰岩	奥羽山脈 新生代新第三紀
200	DXVII	中央	109田区　西端　Ⅱ～Ⅲ層上面	99.30	—	—	—	凝灰岩	奥羽山脈 新生代新第三紀
201	BXV	中央	05号住居跡　埋土	249.40	6.7	9.7	3.4	斑糲岩	北上山地 中生代白亜紀

番号	分類	調査区	出土地点・層位など	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石材	産地ほか		備考
202	BXV	中央	05号住居跡　埋土	98.42	6.7	8.1	1.35	蛇紋岩	北上山地	古生代オルドビス紀	写真のみ
203	BXV	北③	06号住居跡　埋土	173.90	5.2	15.8	1.4	頁岩	北上山地	古生代後期	〃
204	BXV	北④	不整形プラン 北トレンチ　黒色土	78.79	6.1	9.6	1.1	デーサイト	北上山地	中生代白亜紀	〃
205	BXV	北③	06号住居跡	178.22	7.3	7.7	2.2	砂岩	北上山地	古生代後期	〃
206	BXV	中央	09号竪穴南　表土	216.50	5.5	6.8	3.1	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	〃
207	BXV	中央	遺物集中プラン　埋土	102.09	5.1	6.6	2.2	蛇紋岩	北上山地	古生代オルドビス紀	〃
208	BXV	中央	土器出土不整形プラン検出時	75.97	6.1	6.4	1.4	頁岩	北上山地	古生代後期	〃
209	BXV	中央	土器出土不整形プラン検出時	129.75	5.9	7.4	2.2	頁岩	北上山地	古生代後期	〃
210	BXV	中央	110田区　東	223.34	7.0	4.6	0.7	頁岩	北上山地	古生代後期	〃
211	BXV	南	北東不整形プラン	198.55	7.1	10.9	2.1	頁岩	北上山地	古生代後期	〃
212	BXV	南	北東　Ⅰ、Ⅱ層	104.35	6.6	7.4	1.5	頁岩	北上山地	古生代後期	〃
213	BXV	南	北東　Ⅰ、Ⅱ層	140.99	6.9	8.4	2.0	砂岩	北上山地	古生代後期	〃
214	BXV	北④	Ⅰ、Ⅱ層	320.60	8.8	9.1	3.2	蛇紋岩	北上山地	古生代オルドビス紀	〃
215	BXV		出土地点不明	183.47	6.6	8.4	2.2	デーサイト	北上山地	中生代白亜紀	〃
216	BXV	北③	06号住居跡	253.38	5.6	10.3	2.7	頁岩	北上山地	古生代後期	〃
217	BXIV	北③	06号住居跡	518.37	—	—	—	蛇紋岩	北上山地	古生代オルドビス紀	〃
218	BXIV	中央	05号住居跡　埋土	300.93	—	—	—	蛇紋岩	北上山地	古生代オルドビス紀	〃
219	BXIV	中央	05号住居跡　埋土	113.15	—	—	—	デーサイト	北上山地	中生代白亜紀	〃
220	その他	北①	不整形プラン　埋土	144.83	—	—	—	頁岩	北上山地	古生代後期	〃
221	その他	中央	110田区　表土	250.18	—	—	—	蛇紋岩	北上山地	古生代オルドビス紀	〃
222	D	中央	110田区　Ⅰ層	17.44	—	—	—	頁岩	北上山地	古生代後期	〃
223	DXVII	中央	110田区　表土	74.10	—	—	—	頁岩	北上山地	古生代後期	〃
224	DXVII	南	T27付近　Ⅰ～Ⅱ層	52.57	—	—	—	ホルンフェルス	北上山地	古生代の頁岩が中生代白亜紀に熱変成	〃
225	CXVa	中央	旧表土	321.09	—	—	—	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	〃

第5表　陶磁器観察表

掲載番号	仮番号	調査区	遺構名・出土地点・層位	特　徴	備考
172	501	中央	03号住居跡周辺、Ⅱ層検出中	染付碗、肥前産、18世紀後	写真のみ
173	502	中央	05号住居跡埋土(10号焼土のブロック)	染付碗、肥前産、18世紀	〃
174	503	中央	110田区表土	灰釉陶器碗、大堀相馬産、18世紀	〃
175	504	中央	109～110田区　Ⅱ層	染付碗、肥前産、18世紀	〃
176	505	中央	110田区　西　表土	染付蓋の付く器種、肥前産、18世紀以降か	〃
177	506	南	111田区　中央　Ⅰ層	灰釉陶器碗、大堀相馬産、18世紀	〃
178	507	南	111田区　中央　Ⅰ層	陶器皿、唐津産、18世紀以降か	〃
179	508	中央	111田区　中央　表土	染付碗、肥前産、18世紀後	〃
180	509	中央	東端　Ⅰ～Ⅱ層	染付皿、肥前産、18世紀以前か	〃
181	510	中央	西端　表土	染付碗、肥前産、18世紀後	〃
182	511	南	東端　表土	染付猪口、肥前産、18世紀	〃
183	512	南	中央　東端　表土～Ⅱ層	磁気紅皿、産地不明、近世	〃
184	513	南	南東端　検出中	染付蓋類、肥前、18世紀	〃
185	514	南	北西隅　掘立柱穴周辺	染付皿、肥前産、18世紀後か	〃
186	515	南	北の畑　Ⅳ層層検出中	陶器、碗か、大堀相馬か、19世紀か	〃

Ⅴ ま と め

西部遺跡は鞆貫川の支流の中居川の東岸、本流との合流点から1.5kmほど遡った右岸に発達した中位段丘上（標高160～170m）に立地する。この段丘面は東西約150m、南北約500mの広がりがあり、遺跡はこの段丘面のやや北側に占地している。遺跡の範囲は東西約100m、南北約200mで、今回の調査は遺跡の北側、中央、西側の一部を細長く調査している。

検出された遺構は縄文時代の竪穴住居跡５棟、土坑９基、焼土21基、集石１、中近世の掘立柱建物跡２棟、溝跡１条、出土遺物は縄文時代の土器８箱、石器類２箱、銭貨２点、陶磁器15点である。各時代の様相を整理して本報告書のまとめとしたい。

縄文時代

出土した土器類を見ると前期初頃、前期前葉、前期後葉、中期末から後期初頭、後期前葉の土器が出土している。この中で最も出土量の多かったのが前期後葉（大木５式）頃の上器群である。遺構もこの時期のものが多く、２～４・６号竪穴住居がこれに該当する。１号竪穴住居跡についてもこの時期の可能性がある。これらの竪穴住居跡は北側調査区で１棟、中央調査区から４棟見つかっている。県教育委員会生涯学習文化課が本遺跡の試掘調査をしたところ、今回の調査区よりもさらに北側（西部遺跡の北端部）には、かなり濃密に遺構が確認されているようである。西部遺跡北端部にある遺構の全てが縄文時代前期に属するかは断定できないわけだが、出土遺物の分布状況などを見るとこの時期の集落は遺跡の北端部から中央部にかけて分布しているようだ。集落を具体的に構成する各遺構の配置であるが、竪穴住居跡は遺跡北側（北側調査区）から中央部（中央調査区）に位置している。所謂大形住居とそうではない住居からなるが、限られた調査区であったため、例えば住居が広場を中心に円形に配されるといた傾向までは見極めることができなかった。今回の調査に基づいて考えられた居住域として第35図に示した。沢のある遺跡北側に偏って居住域が位置していると想定した。土坑については住居と近い場所から見つかることが多く、中には重複しているものもある。特にその配置に大きな傾向はなく、住居付近に適宜構築されていたのであろう。焼土については中央調査区（遺跡中央）から密に検出されている。この中には住居の炉跡であったものも含まれるかもしれないが、注意して精査しても住居のプランは確認できなかった。よって遺跡中央には屋外で火を焚いた場所があったと解釈している。物を廃棄した場（捨て場）については南側調査区で１箇所、可能性のある場所がある。筆者が設定した居住域より地形的に下った南西部にあり、遺構などはなく純粋な捨て場のようである。この他にも何箇所か居住域よりも低いほうへ物を廃棄していたのではないだろうか。墓については今回の調査では見つからなかったので、調査の及ばなかった場所にあるとみるのが妥当であろう。居住域が遺跡の北端から中央に位置すること、遺跡東側は発掘調査が殆ど行われていないことなどから、墓域は遺跡南側から東側にあると考えたい。道路も見つかっていない。本遺跡と大迫中学校との間に沢があり、その沢に沿って現在も下に（下位段丘面へ）降りる道があるが、筆者が想定した居住域とも近く縄文時代にもここが道路になっていたと考えたい。この他にも下中居地区へは遺跡南端から中位段丘面上を行く道路が想定される。

出土遺物について、ここでは石製品と石錘について簡単に触れたい。石製品は石剣状・石棒状のものと、円形を基調とし孔をあけて装飾品としたものとに分けられる。前者は何れも未製品と見られ、完全に出来たものは出土していない。これらの石製品とともに敲石・磨石も多く出土しており、本遺跡では石製品を製作して他の遺跡（村落）へ搬出していた可能性を指摘できる。大迫町地区には縄文

時代前期の遺跡が複数確認されているが、詳細な時期までは分からないのでここでは周辺の遺跡との交易に用いられたと推察するに留めたい。石錘もまとまった量が得られたのは旧大迫町の遺跡では初めてであろう。ここでは石錘を漁労具（網漁の錘）という前提で考察を進めることとする。遺跡は中居川の東岸に位置するものの、川幅は広くない。縄文時代前期には川幅が今の倍あったとしても、舟と組み合わせた網漁は難しいであろう。よって、舟を使った網漁（漁場）は稗貫川本流まで下って行われていたと考えたい。中居川においては複数の網を持って川に入り、魚を取り囲む原始的な網漁は可能と思われる。漁場である稗貫川本流沿いではなく、支流に入った場所に集落を営んでいたことをどのように考えたらよいか、稗貫川沿いに同時期の集落が存在している可能性はないかなどが現時点では課題として残っているが、石製品とともに生業の一端を示す資料を得て推測に推測を重ねてみた。

旧大迫町内には200箇所以上の遺跡があり、その大半は縄文時代の遺跡である。本遺跡は前期後葉（大木５式頃）を主体とし、前期初頭や後期初頭にも小規模な集落があったといえる。このような遺跡のあり方は旧大迫町内の遺跡群の中にどのように位置づけられるのだろうか。分布調査のみの遺跡では時期を特定するのに限界もあろうが、時期ごとの遺跡分布を簡単に整理してみた。西部遺跡は現在外川目地区あるが、ここでは大迫地区に入れて作表している。本遺跡を含めた外川目地区に前期の遺跡が多いことに注目される。

<table>
<tr><td>時期</td><td rowspan="2">早期</td><td colspan="4">前　期</td><td colspan="3">中　期</td><td colspan="4">後　期</td><td colspan="3">晩　期</td></tr>
<tr><td>地　域</td><td>前葉</td><td>中葉</td><td>後葉</td><td>末葉</td><td>前葉</td><td>中葉</td><td>後葉</td><td>初頭</td><td>前葉</td><td>中葉</td><td>後葉</td><td>前葉</td><td>中葉</td><td>後葉</td></tr>
<tr><td>亀ヶ森</td><td></td><td colspan="8"></td><td colspan="4"></td><td colspan="2">小　田</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">内川目</td><td></td><td colspan="7"></td><td>内村</td><td></td><td colspan="4">立　石</td><td colspan="2"></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td colspan="9">さらばば、和村</td><td colspan="4"></td><td colspan="2"></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">大　迫</td><td>上の山</td><td>（西郭）</td><td></td><td>西郭</td><td colspan="2">天神ヶ丘</td><td></td><td colspan="2">観音堂、（西郭）</td><td></td><td colspan="3"></td><td colspan="2">天神ヶ丘</td><td></td></tr>
<tr><td></td><td colspan="9">熊野上、明道沢、白山</td><td colspan="4"></td><td colspan="2"></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">外川目</td><td></td><td colspan="2">馬場長根</td><td></td><td>下中居Ⅰ</td><td>下中居Ⅱ</td><td></td><td>馬場長根</td><td></td><td colspan="3"></td><td colspan="2"></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td colspan="5">岩鞍、栃沢口、八木巻イタコ塚</td><td colspan="4">岩　脇</td><td colspan="4">八木巻イタコ塚</td><td colspan="3">八木巻イタコ塚</td></tr>
</table>

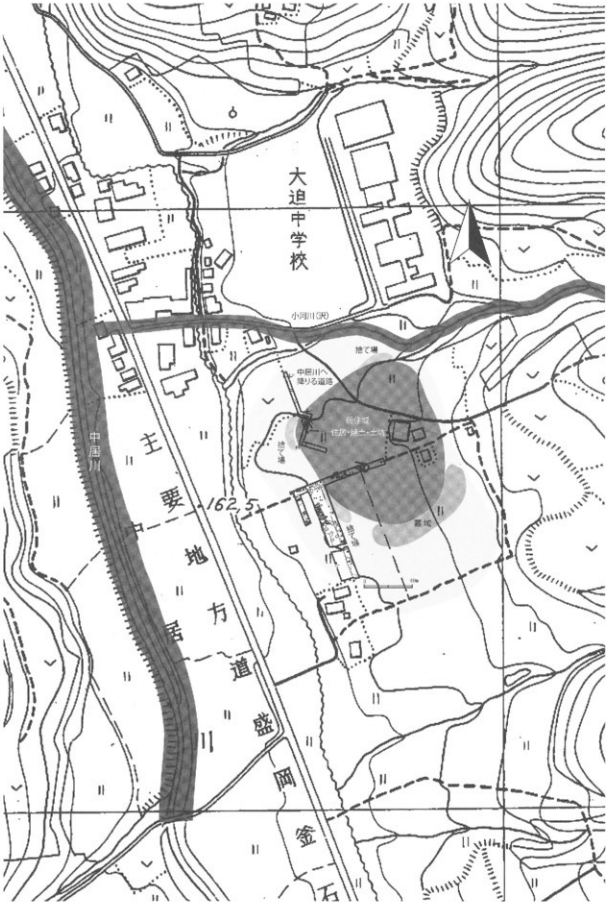
中世

南側調査区から掘立柱建物跡が２棟検出されている。１号掘立柱建物跡は上屋柱と下屋柱からなる構造、２号掘立柱建物跡は残りがよくないが総柱の可能性がある建物であった。平面形式をみると近世民家に似ているが柱穴からは永楽通宝が出土していることから中世まで溯ると判断した。中世陶磁器は出土していない。周囲には堀や土塁などはなく城館に伴う建物ではないようである。集落を構成する建物になるのか、別の施設となるか今回の調査ではよく分からず課題として残っていが筆者は通常の集落か、金採掘に関連する施設のどちらかではないかと考えている。調査区内には建物の北半部のみがあり、残りは調査区外に残されている。周囲からも建物跡が見つかる可能性があり、発掘調査が計画される際には注意が必要である。近世になるとこの地区の集落は殆どが街道沿いに分布すると予想されるため、本遺跡で検出される建物などは中世と近世の遺構が重複せずに把握しやすい状態で残っている可能性が高い。

その他

ここでは採掘坑について触れておきたい。この遺跡の殆どは現況が水田であったが、その水田の中に陥没して出来た穴が至る所に見られた。その大きさは一様ではなく径30cm程の穴から1mを超えるものまである。地元の方はこれらの穴を簡単な柵で囲ったり、残土や礫で埋めたりしているようである。今回の調査でも調査区のほぼ全域から見つかっている。基本的に遺物はなく時期は不明で、地元では近世説、中世初頭説、地下水の流路説などがある。当職としては平面図のみを作成し、縄文時代のフラスコ形土坑などではないと判った段階で精査を止めることとした。精査は限定されたものであったが、やはりこれらの穴は人為的に掘り進んだ坑道との印象を強く持った。段丘崖などから水平（横）方向に掘り始め、遺跡ののる中位段丘面の中を目的の鉱物を得るために網の目のように掘り進んでいるのであろう。その中で所々天井が崩落して地上に陥没穴が点在しているのが現在の状況である。

近世になると旧大迫町における金採掘が盛んになったことが大迫町史などから窺い知ることができる。但しそれらの資料に見られる採掘地は山間部であり、本遺跡のような比較的大迫中心地に程近い場所にはなかった。資料に残る例がすべてではないとは思うが、本地域で遺跡の発掘調査が行われる際には採掘坑の存在に注意する必要があると考える。



第36図　西部遺跡における縄文時代前期後半の集落概念図

VI 分　　析

西部遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

西部遺跡は、岩手県花巻市大迫町の内陸部、中位段丘上に立地する。測定対象試料は、６号住居炉跡出土木炭（No.１：IAAA-91977）１点である。

2　測定の意義

遺構（住居）の時期を明らかにするとともに、土器の年代観について考える一助とする。

3　化学処理工程

(1)メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
(2)酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
(3)試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で２時間加熱する。
(4)液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。
(5)精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
(6)グラファイトを内径１mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4　測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

(1)年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。

(2)^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は、δ^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3)δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

(4)pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。

(5)暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

6 測定結果

6号住居炉跡出土試料No.1の^{14}C年代は4890±40yrBPである。縄文時代前期後葉頃に相当する値である。炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-91977	No.1	6号住居 炉跡	木炭	AAA	−25.95±0.34	4,890±40	54.37±0.23

[#3293]

測定番号	δ^{13}C補正あり		暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-91977	4,910±30	54.27±0.23	4,894±34	3696BC−3649BC (68.2%)	3761BC−3725BC (5.8%) 3715BC−3637BC (89.6%)

[参考値]

参考文献

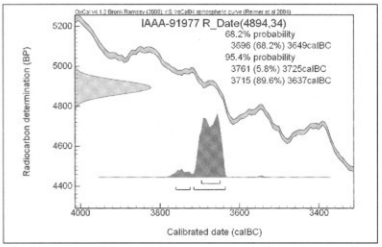
Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C.2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



[参考]暦年較正年代グラフ

写　真　図　版

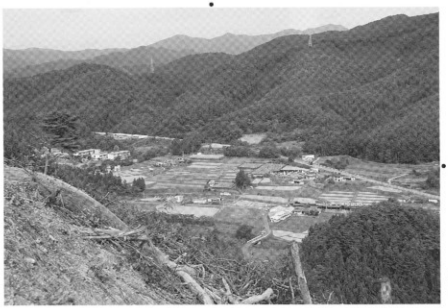
手前は稗貫川の支流の中居川と外川目地区、奥が大迫地区、更に奥が亀ヶ森地区（南から）

写真図版１　花巻市大迫町

遺跡遠景（東から）

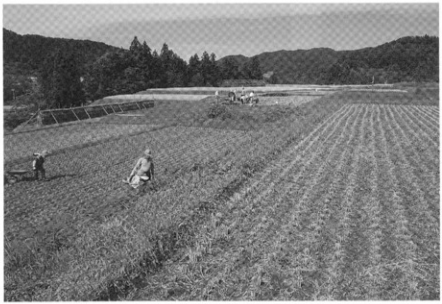
遺跡遠景（上が西、右のグランドは大迫中学校）

写真図版２　遺跡遠景



遺跡の立地する中位段丘
（西から）

写真下に遠野街道
その上の田面の殆どが西部遺跡
左（北）に大迫中学校



現況は水田
その前は桑畑
旧地形は西面する緩斜面であった

写真図版３　遺跡近景と現況

調査区近景（南西から）

南側調査区南端（南から）

南側調査区南端（西から）

南側調査区（北から）

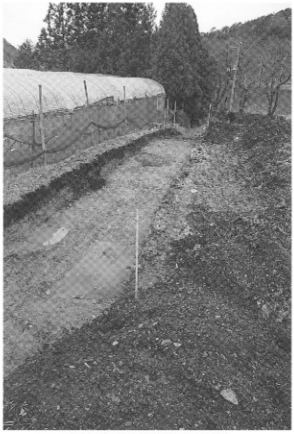
中央調査区（西から）

中央調査区（東から）

中央調査区調査状況（西から）

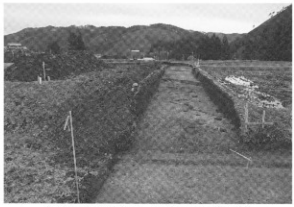
中央調査区調査状況（東から）

写真図版４　遺跡現況ほか



北側調査区北端調査状況（南から）

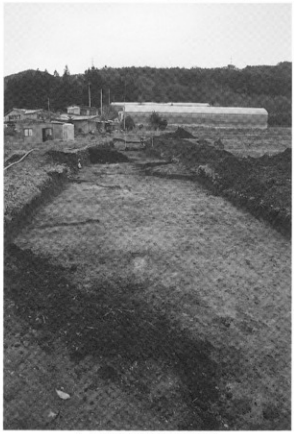
北側調査区調査状況（北東から）



北側調査区調査状況、６号住付近（北から）

北側調査区調査状況、６号土坑付近（西から）

北側調査区調査状況、６号住付近（北から）



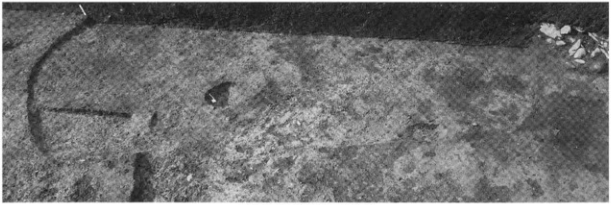
中央調査区調査状況（西から）

写真図版５　調査状況

中央調査区調査状況（西から）

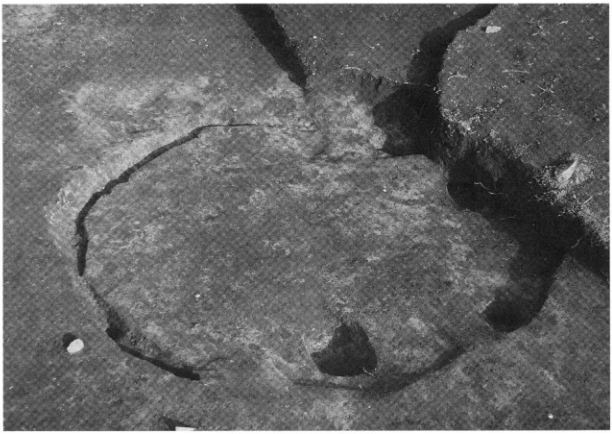
南側調査区調査状況（南から）

1号竪穴住居跡平面（東から）

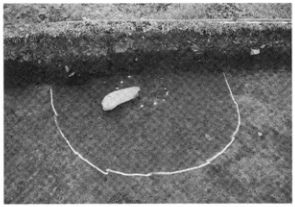


1号竪穴住居跡断面（南から）

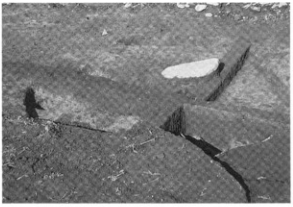
写真図版6　竪穴住居跡1ほか



2号竪穴住居跡平面（西から）



検出状況（北から）

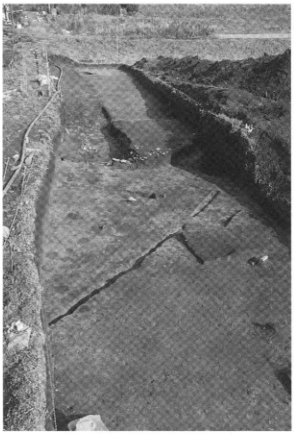


2号竪穴住居跡断面（南から）

炉平面（北から）

炉断面（南から）

写真図版7　竪穴住居跡2

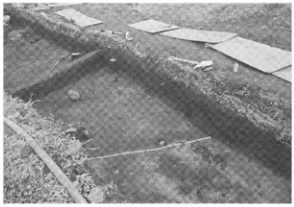


3～5号竪穴住居跡平面（西から）

3～5号竪穴住居跡平面（東から）

3～5号竪穴住居跡断面（西から）

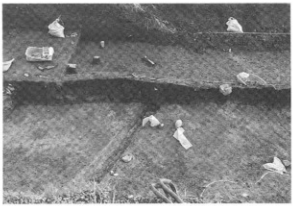
3～5号竪穴住居跡断面（東から）



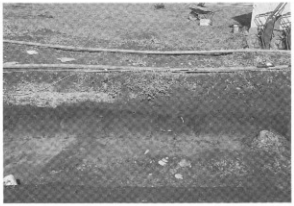
10号焼土平面（東から）

10号焼土断面（西から）

写真図版8　竪穴住居跡3



8号焼土断面（北から）

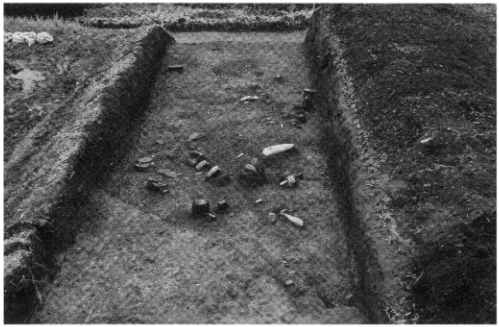


7号焼土断面（南から）

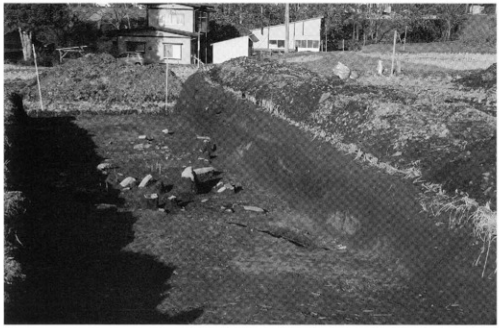
6号竪穴住居跡平面（北から）

6号竪穴住居跡断面（東から）

写真図版9　竪穴住居跡4

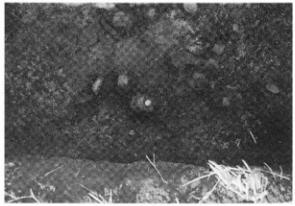


6号竪穴住居跡平面
（南から）



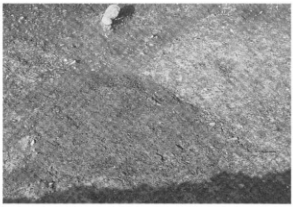
6号竪穴住居跡断面
（南から）

6号竪穴住居跡断面（南から）



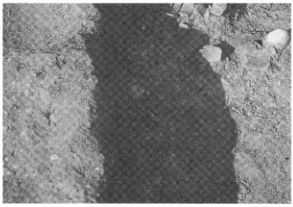
17号焼土平面（東から）

写真図版10　竪穴住居跡5



15号焼土平面（東から）

16号焼土平面（東から）



17号焼土平面（南から）

6 号竪穴住居跡内には土器や礫が散在

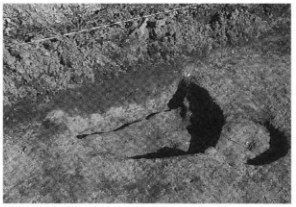
6 号竪穴住居跡出土遺物

掲載番号14　出土状況

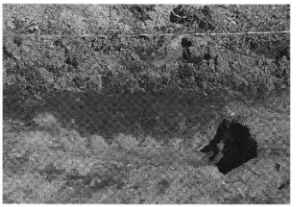
掲載番号27　出土状況

遺物　出土状況

写真図版11　竪穴住居跡６

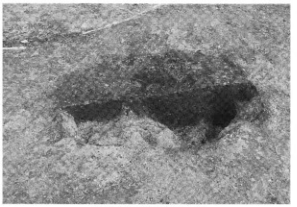


2号土坑平面（北西から）

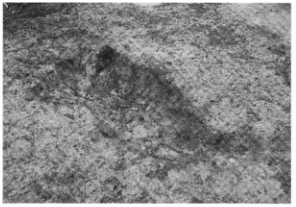


2号土坑断面（西から）

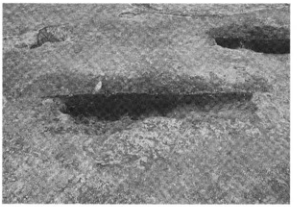
3号土坑平面（西から）



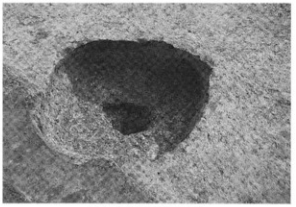
3号土坑断面（西から）



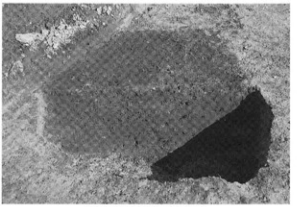
4号土坑平面（西から）



4号土坑断面（西から）

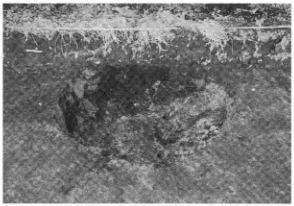


5号土坑平面（西から）

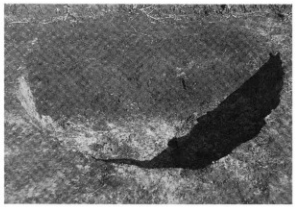


5号土坑断面（南西から）

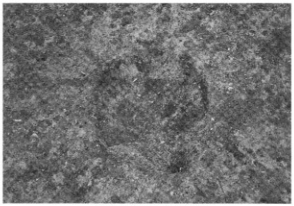
写真図版12　土坑1



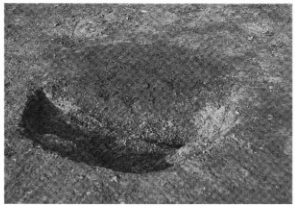
6号土坑平面（南から）



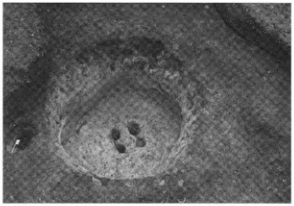
6号土坑断面（南から）



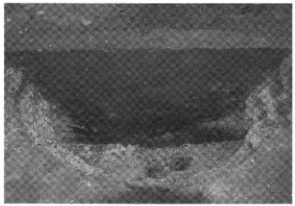
7号土坑平面（南から）



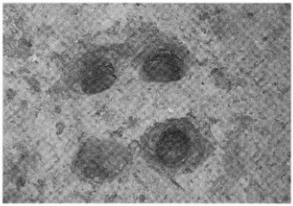
7号土坑断面（南から）



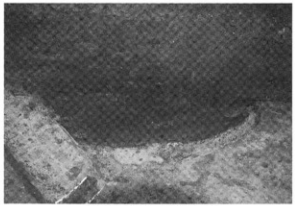
8号土坑平面（北から）



8号土坑断面（東から）



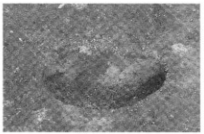
8号土坑底面にある小柱穴



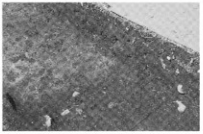
8号土坑平断面（北からから）

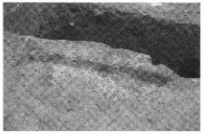
写真図版13　土坑2

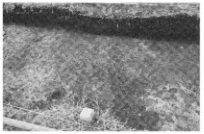
1号焼土平面

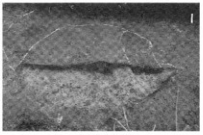

1号焼土断面

2号焼土平面

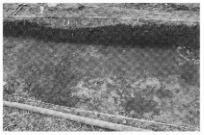

3号焼土平面

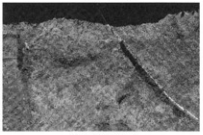

3号焼土断面

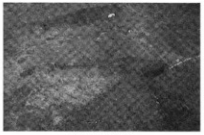

4号焼土平面

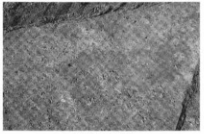

4号焼土断面

5号焼土平面


5号焼土断面


6号焼土平面

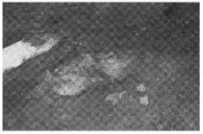

6号焼土平面


7号焼土平面

8号焼土平面

9号焼土平面

9号焼土断面

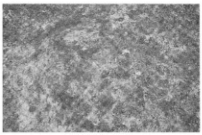

10号焼土平面

10号焼土断面

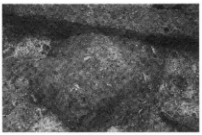
11号焼土平面

写真図版14　焼土 1

11号焼土断面



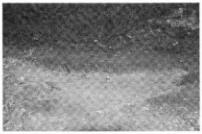
12号焼土平面



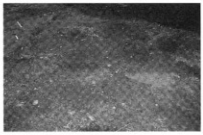
13号焼土平面

14号焼土平面

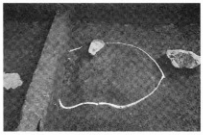
15号焼土断面



17号焼土断面

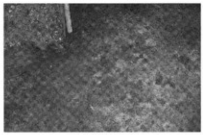


18号焼土断面



19号焼土平面

19号焼土断面



21号焼土平面

1号集石平面（東から）

1号溝跡平面（西から）

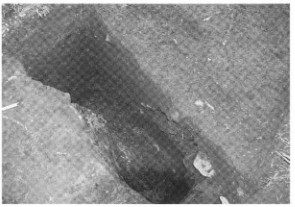
1号集石平面（東から）

写真図版15　焼土２、集石、溝跡

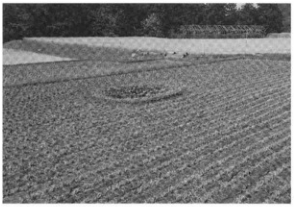
遺物出土状況

遺物出土状況

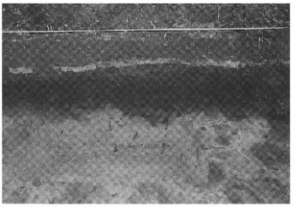
金採掘坑



金採掘坑



金採掘坑

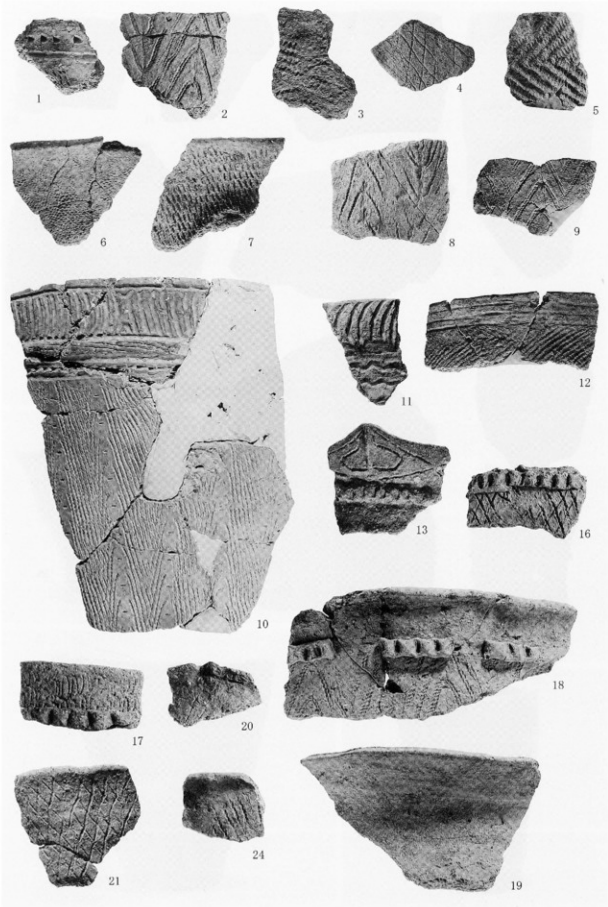


基本土層

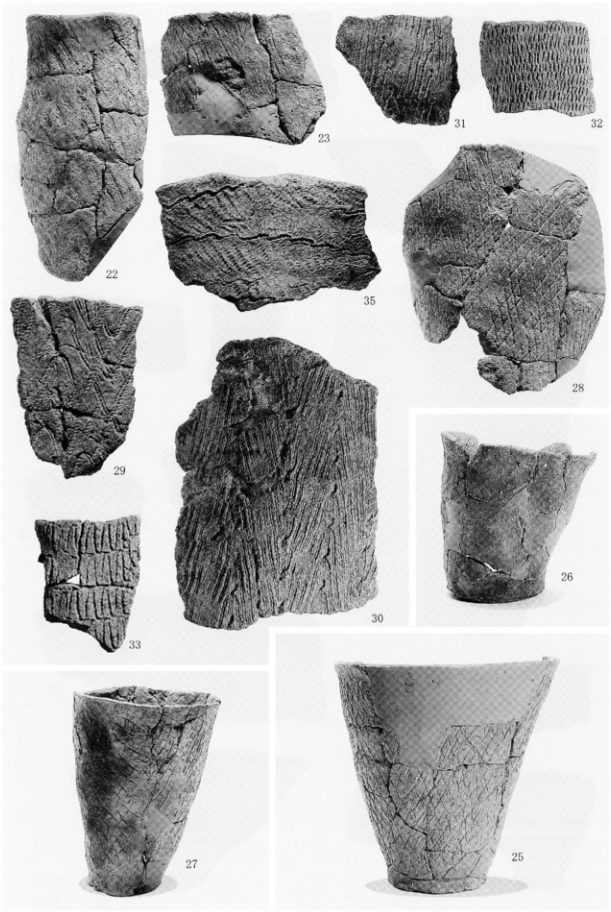
調査風景

調査風景

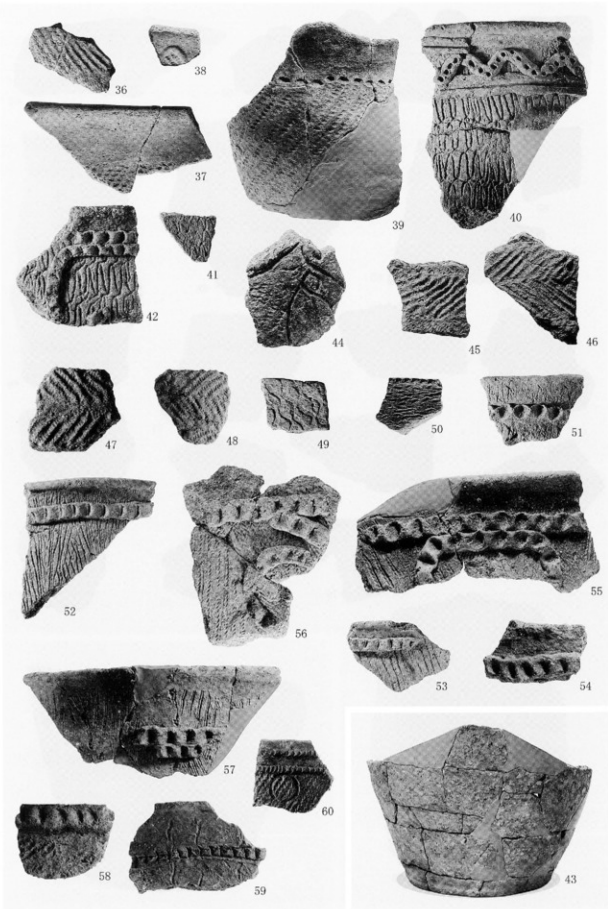
写真図版16　調査風景ほか



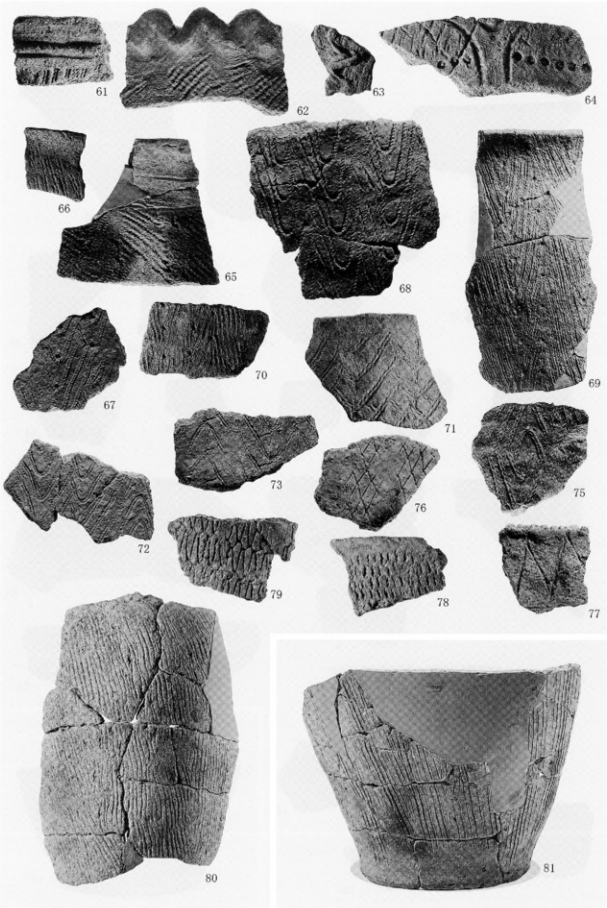
写真図版17　土器1



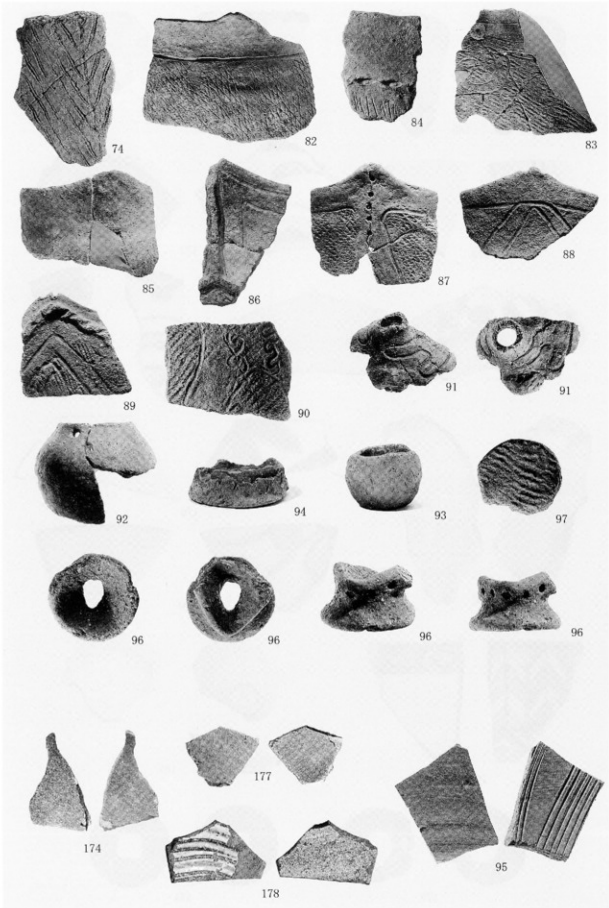
写真図版18　土器２


36
38
37
39
40
41
42
44
45
46
47
48
49
50
51
52
56
55
53
54
57
60
58
59
43

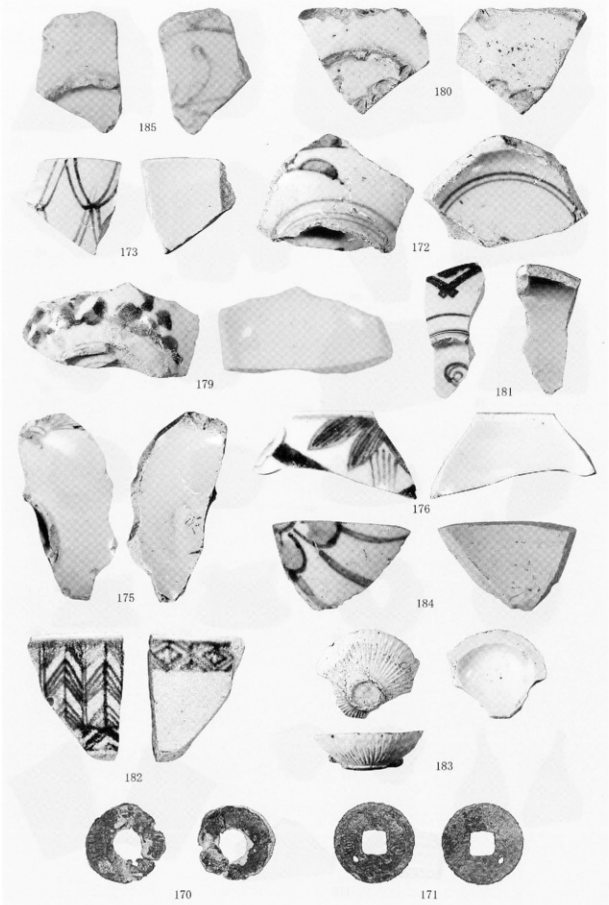
写真図版19　土器３



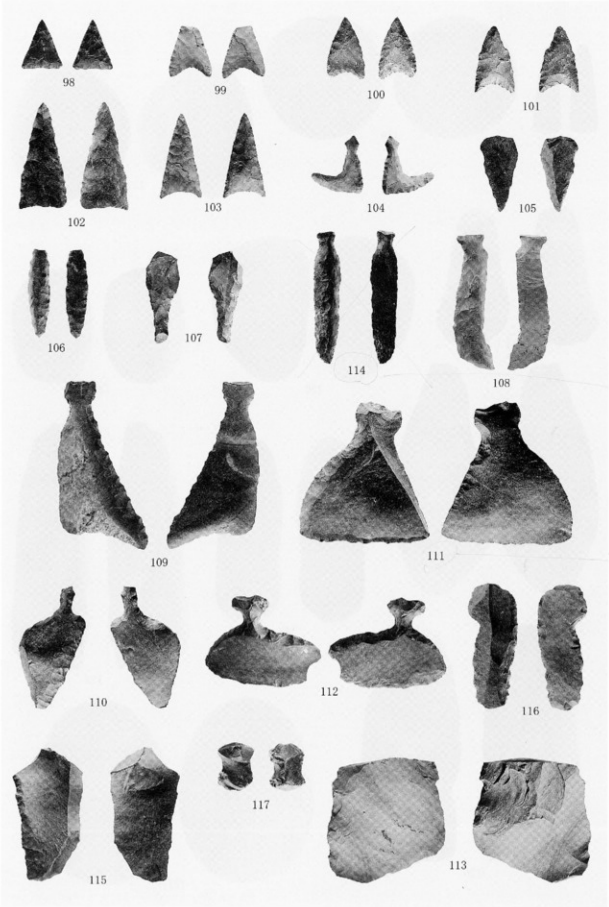
写真図版20　土器4



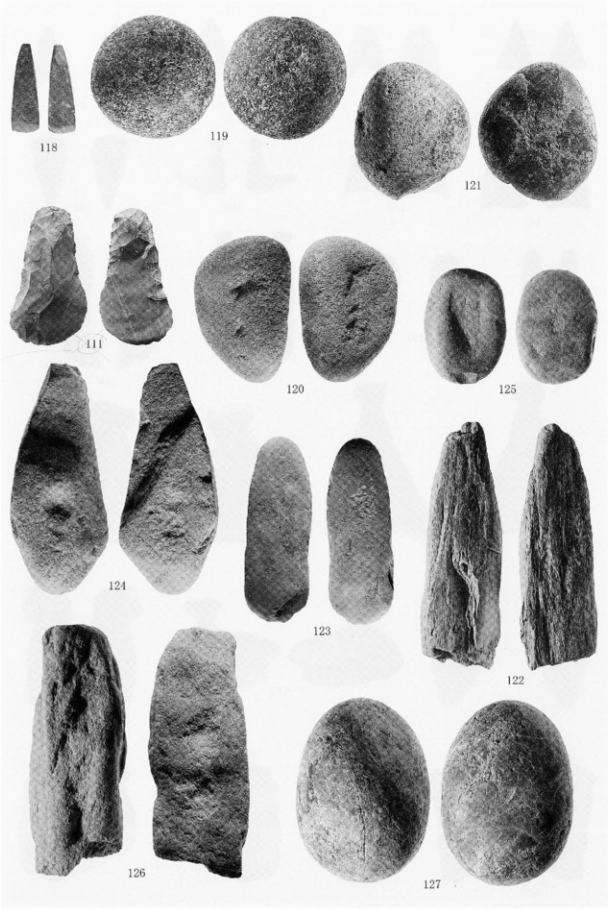
写真図版21　土器５、土製品、陶磁器１



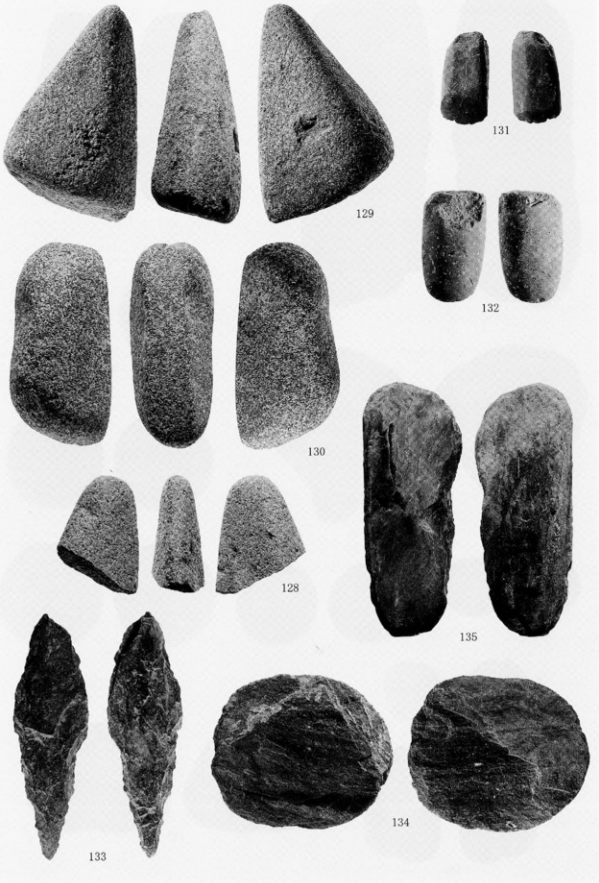
写真図版22　陶磁器２


98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
114
108
109
111
110
112
116
117
115
113

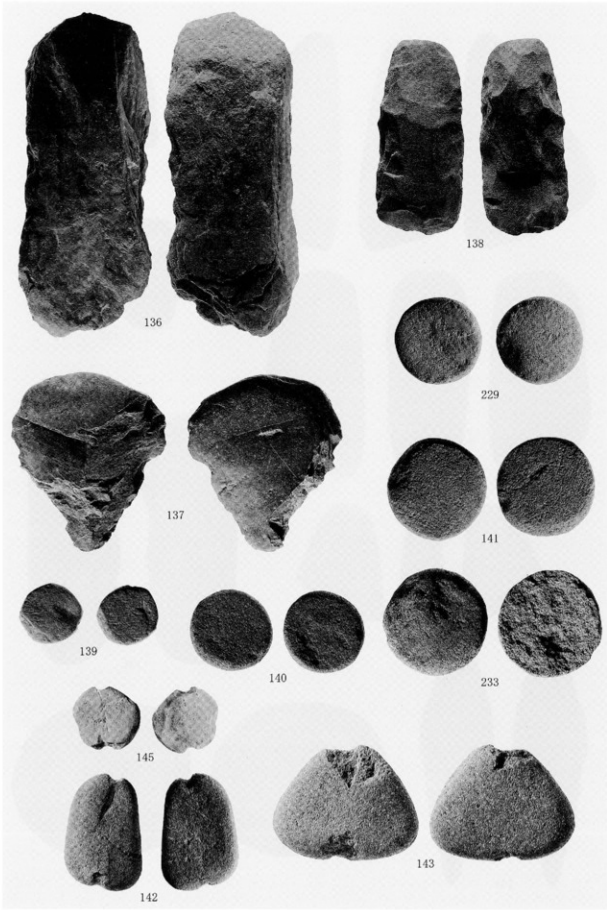
写真図版23　石器類１



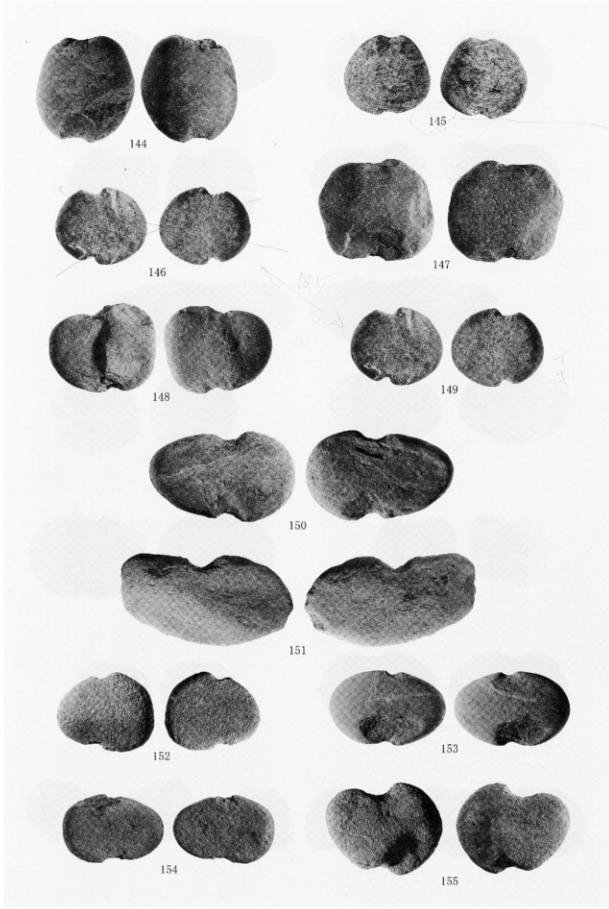
写真図版24　石器類２



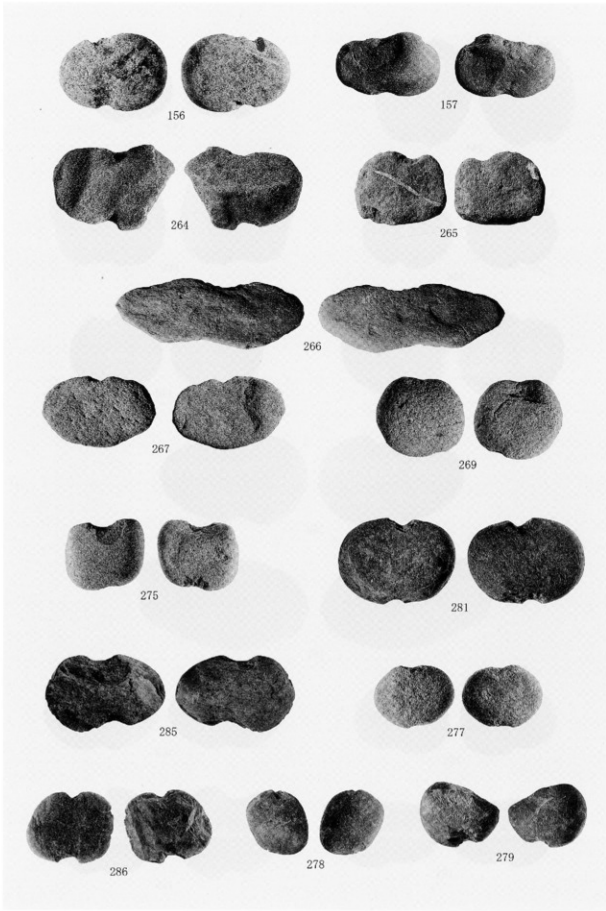
写真図版25　石器類3



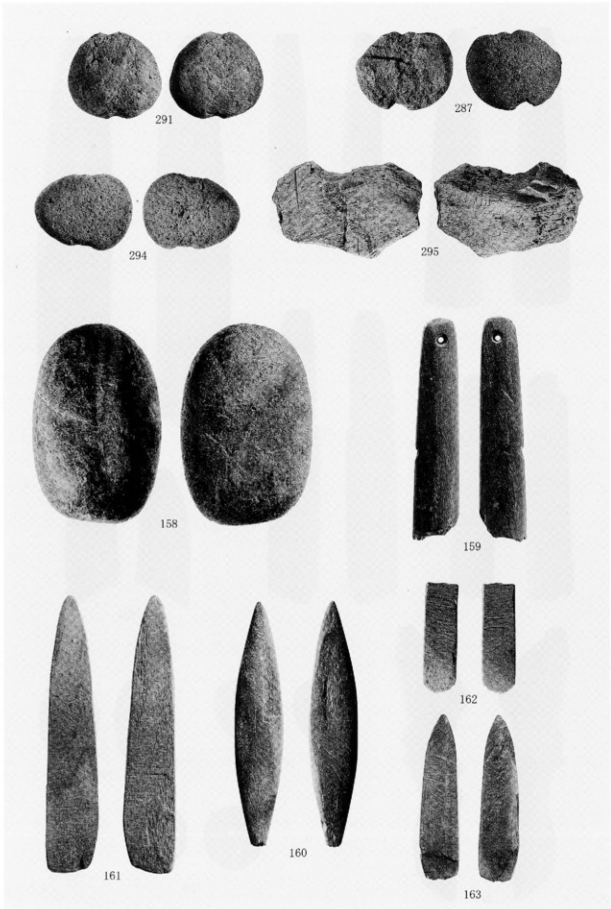
写真図版26　石器類4



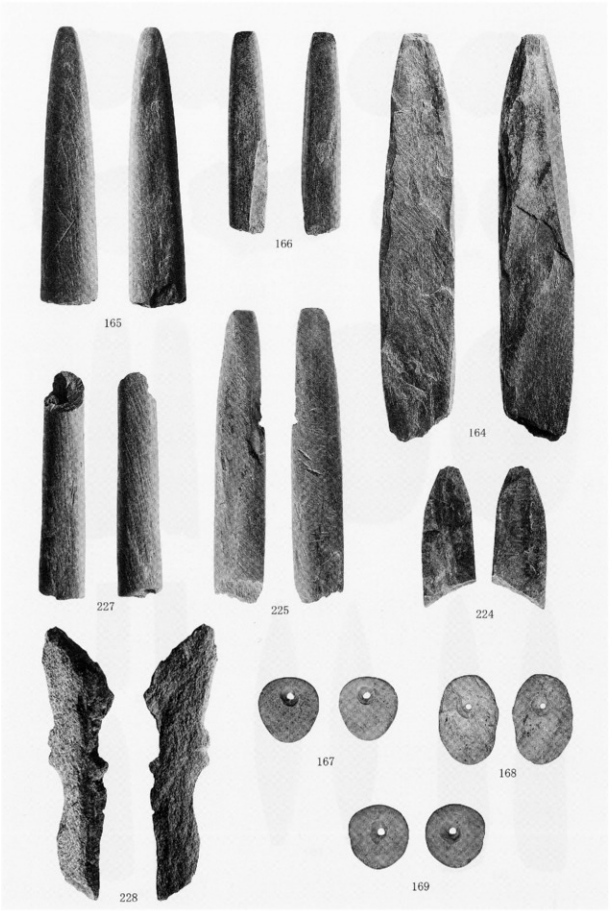
写真図版27　石器類５



写真図版28　石器類6



写真図版29　石器類７



写真図版30　石器類８

報告書抄録

ふりがな	せいぶいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	西部遺跡発掘調査報告書
副書名	中山間地域総合整備事業中居地区関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第585集
編著者名	杉沢昭太郎・菅野 楢
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638－9001
発行年月日	2011年3月3日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
西部遺跡	いわてけんはなまきし 岩手県花巻市 おおはねまちとうさとかわめ 大迫町外川目 だいちわりばん 第27地割141番 ち 地ほか	032051	ME09-0319	39度 27分 35秒	141度 17分 34秒	2009.09.01 ～ 2009.11.19	1,450㎡	中山間地域総合整備事業中居地区

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西部遺跡	集落跡	縄文時代 (前期)	竪穴住居跡 5棟 土坑 4基 焼土 21基 集石 1基	縄文土器 石器 石製品	石錘 石製釣針
		中世 (後半)	掘立柱建物 2棟 溝跡 1条	銭貨 陶磁器	
		時期不明	土坑 5基		

要約

遺跡は稗貫川の支流である中居川の東岸に形成された中位段丘上に立地している。今回の調査は遺跡の北・中央・西・南側を細長く調査したことになる。その結果、縄文時代前期後葉の遺構遺物が最も多く見つかり、この時期の集落であることが分かった。残りはよくないが大形の竪穴住居跡も複数確認され年代測定も実施した。石錘や石製品の未製品などが出土しており、生業・交易・祭祀を推察するのに有効な資料が得られたほか、縄文時代中期・後期の遺物も少量出土している。

中世後半の掘立柱建物跡も遺跡東側で検出されたが限られた調査区であったためその性格については判然としない。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第585集

西部遺跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業中居地区関連遺跡発掘調査

印　刷　平成23年２月28日
発　行　平成23年３月３日

編　集　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話（019）638－9001

発　行　岩手県県南広域振興局農政部北上農村整備センター
〒024-8520　岩手県北上市芳町２番８号
電話（0197）65－5650

(財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023　岩手県盛岡市内丸13番１号
電話（019）654－2235

印　刷　(有)小松茂印刷所
〒020-0025　岩手県盛岡市大沢川原二丁目5-37
電話（019）623－6073

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2011